

関山

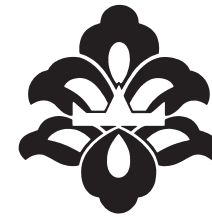
かんざん

第12号

関
山

中尊寺〈寺報〉第十二号

平成十八年(二〇〇六)二月



寺報 中尊寺

〈発行 中尊寺〉

目次

寺報ぐらびあ	
希望を共に語る―清衡公が抱いたロマン	千田 孝信 8
平泉の世界遺産登録と骨寺村荘園遺跡	大石 直正 11
中尊寺をかざる花、宝相華	久保 智康 26
人生の応援団―「土日説法」断想	千田 孝信 33
〈緊急アピール〉衣川遺跡群の保存を!!	
新発見・衣川遺跡群と源義経の「衣川館」	
―泉三郎忠衡の「家」はどこか―	菅野 成寛 36
「危機的世界遺産」紀行	佐々木邦世 44
清衡公発願紺紙金銀字交書一切経	
―『科研調査報告書』を読む―	菅原 光聰 56
〔福聚教会・中尊寺支部便り〕	
全国大会参加ツアーを振り返り	佐々木典子 59
「タイ王宮」迷想私抄	高橋はるみ 61
〔グラビア解説〕	
還蔵された金銀字経	
風信／語録	68 67
〔レポート〕	
中尊寺での博物館実習	70
研究／出版	78
関山句裏・関山歌籠	81
「天池ハス(中尊寺天池跡出土)」開花報告	北嶺 澄照 88
陸奥教区宗務所報 第二部 中尊寺関係	90
執務日誌抄	97
御奉納者御芳名	117
浄財御奉納者御芳名	117
不動尊篤信御奉納者御芳名	118

〈表紙〉
中尊寺貫首「土日説法」



雪中の「梵焼供」修行（結衆）



平家琵琶奉納(10月22日/本堂)

橋本敏江師が義経公追善法楽に「腰越状」を奉納。



大江幸若舞(9月3日)

中世芸能の幸若舞を全国で唯一伝承している大江幸若舞。「和泉城」、「高館」の平泉ゆかりの番組が上演された。



大池ハス(中尊寺大池跡出土)の開花
(7月24日)

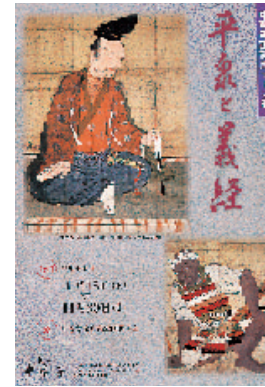
中尊寺大池跡の秀衡時代の地層から出土したハスの実が、栃木県河内町の恵泉女学園短大長島時子氏の栽培で開花した。

(記事88ページ)

龍笛 銘「薄墨」演奏

(8月24日)

大施餓鬼会の法楽として、義経所持との伝承のある龍笛の演奏が奉納された。



讃衡蔵でテーマ展を開催
(1月15日～11月30日)



春の藤原まつり 能「八島」(5月5日)

時報ぐらびあ

—「義経」特集—

大河ドラマ「義経」放映で
にぎわった1年を振り返ってみる。



源義経公東下り行列(5月3日)

大河ドラマ「義経」主役の滝沢秀明氏が義経役とあって境内は大混雑。この日1日で25万人が平泉を訪れた。



『源義経公東下り絵巻』図録発行(9月3日)

(中尊寺にて頒布中)



還蔵された金銀字経
(平成17年12月25日、記事67ページ)



国宝 金銅華鬘(記事26ページ)



大節分会（2月3日）



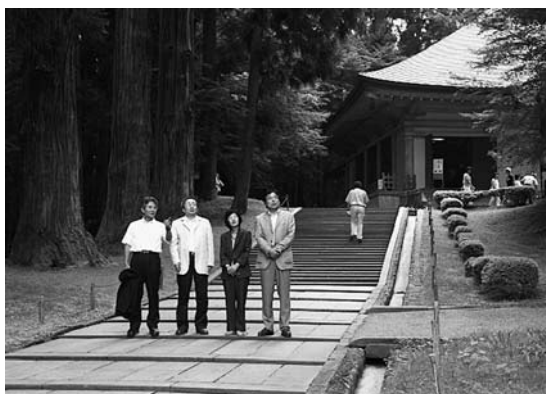
地元子供会早朝坐禅（7月31日）
県指定文化財・法泉院小前沢坊庫裏で。



大正大学博物館実習
（8月27日～9月1日、記事70ページ）



北東北三県・北海道知事サミット（9月2日／本堂）



岩手、秋田、青森、北海道の四知事によるサミットが中尊寺で開催された。



今様奉納（9月3日）
日本今様譚舞学会の方々により奉納された。



いっくら国際文化交流会一行来山
(11月17日／法泉院旧庫裏)



カンボジア・タイへ研修旅行

今年度の中尊寺研修旅行は、カンボジアと
タイの遺跡や寺院を訪れた。
(記事44ページ・61ページ)

タイ 暁寺（ワット・アルン）



カンボジア アンコールワット

希望を共に語る

— 清衡公が抱いたロマン

貫首 千田孝信

昨年十一月末、世界遺産アンコール・ワット視察の得難い機会に恵まれた。十二世紀、カンボジア王朝がインドシナ半島を統一した活力で建造した都城・王宮・寺院の巨大石造遺跡である。広大な導入空間の彼方に、宮殿の尖塔群が高く聳えるパノラマには、息をのむような美観がある。仏教・ヒンズー教混合ではあるが、クメール民族伝来の神話・宇宙観と当時の社会生活の諸相が三重回廊のレリーフに豊富に刻まれている。十二世紀の所産文化が隣接国の侵略によって、その後凋落した時点で平泉文化に相似する側面もある。

東のベトナムと西のタイの強国の狭間で、カンボジア十二世紀の栄光は無惨にもジャングルの闇に埋もれ去った。闇は長く続き、二十世紀後半にフランス植民地の汚辱から独立を果たしながらも、ポルポトのジェノサイド（集団殺戮）が勃発し、その忌まわしい記憶を払いのけながら、いまカンボジ

アは暗闇のなから立ち上がるうとしている。

およそ地上で隣接する部族・民族・国家間には、それぞれに固有の自負のゆえに、愛憎に採まれつつ争い合う無数のドラマがある。人類の歴史は人間の尊厳と悲惨の、悲しい累積でもあるのだ。

地球という最も美しい天体に生を享けながら、人類はいつの日に、憎悪と復讐の連鎖から脱却して、揺るぎない平安を手にすることができるのだろうか？

いかなる宗教・イデオロギー・正義観に基づいても、武力・暴力による制圧は新しい憎悪と復讐の種を撒くだけに終わる。このことを身をもって体得し、ひたすら自分自身の心のなから憎悪と怨念の芽を摘みとろうと試みたのが、わが平泉の清衡公だった。

彼は異質なものを敢えて取りこむ勇氣と、異質な人間とも希望を共に語り合う寛容の持ち主だった。自分を超える高い次元の普遍的価値を取り入れて、自分をより高めようとする先取のロマンに燃えた男だった。

例えば清衡の衡は出羽清原の命名だった。しかし彼は後三年役の恩讐を超えて、藤原姓に戻っても衡を捨てることはなかった。加えて基衡・秀衡・泰衡と、衡を踏襲したのである。出羽の由利八郎は、この清衡以来の御館の御恩を肝に銘じたゆえに、東北きっての武士として『吾妻鏡』にその名を録さ

れたのだ。このように、たとえ小さなことであっても、怨みに報いるに徳を以てすれば、必ず新しい徳が芽生えるのである。敵味方の二元を超える細やかな配慮を回向すれば、その恩徳は必ず高い次元の普遍を開くのである。

二十一世紀の現代世界では、アフリカ諸国内の部族同志の果てしない内戦、ユダヤとパレスチナ、イスラムとキリスト教、アラブ原理主義とアメリカグローバリズム、日本に隣接する極東アジア諸国、みな短絡な勸善懲悪の復讐倫理だけでは、絶対にその二元の闇を超えることはできない。

人はみな老若を問わず、それぞれに念を残して死んでゆく。生まれた人間の数だけ不本意の死があるのだ。生死の彼方から如來にょらいする高次元のひかりに出会わなければ、人間に究極の安心はない。これを清衡公が誰から学びとったかは分からない。しかし清衡公が恩讐二元を超えた高次元のひかりに出会ったことは間違いない。金色堂はその動かない証である。

平泉の世界遺産登録と 骨寺村莊園遺跡

大石直正

一

平泉の文化遺産をユネスコの世界遺産リストに登録するために、準備が進められている。そしてその中に「骨寺村莊園遺跡」を含み込むことが予定されている。骨寺村とは一関市巖美町の本寺地区を中心とする地域で、中世には中尊寺の経蔵別当領だった村、広い意味での莊園だったところである。

この村については、それを描いた鎌倉時代の絵図（絵地図）が二枚、中尊寺にのこされていて、それは国の重要文化財に指定されている。一般に莊園絵図といわれているものの仲間で、二枚を合わせていうときは『骨寺村絵図』、在家（住居）や水

田の形を写實的に描いている方を仮に『在家絵図』、村のなかの神社などの経営費用を支弁するために設定された仏神田の記述がある方を『仏神絵図』という。その絵図に描かれている景観は現在の本寺地区の景観ときわめてよく一致する。つまり本寺地区は中世の村の景観がたいへんよく保存されているところなのである。

中世の莊園絵図は主なものだけでも三〇点ほどある。しかし村の中の在家や水田の形状を写實的に描いたものはごくわずかしかないし、それも現地の景観となると、近世以降の開発、近・現代の都市化の中で、絵図に描かれた景観のほとんどは失われてしまった。中には絵図に描かれている場所が現在のどこにあたるのか、判断に苦しむところもあるほどである。本寺地区は中世以来の莊園の景観がよくのこっている希有の場所である。

そのため本寺地区は、二〇〇五年三月に「骨寺村莊園遺跡」として国の史跡に指定された。莊園遺跡としては大阪府の日根野莊と群馬県の新田莊につぐ三例目である。そして今回、一段上の世



村内から見る栗駒山

界遺産リストへの登録を目指すことになったのである。

世界遺産には文化遺産と自然遺産がある。これまで日本では法隆寺・姫路城をはじめとして「古都奈良の文化遺産」「古都京都の文化遺産」「紀伊山地の霊場と参詣道」などが文化遺産として登録され、白神山地・屋久島・知床などが自然遺産として登録された。しかし純粹の農村が文化遺産として登録された例はない。本寺地区は今も農村である。「平泉の文化遺産」の一部としてはあっても、純粹の農村が文化遺産として登録されることになるのであれば、それは画期的なことである。

その背景には、世界遺産の側で、人間と自然環境との交流を顕著に示す「文化的景観」が、文化遺産の基準として新たに採用され、フィリピンのコルデイレラの棚田が文化遺産に登録される、といったような動きがあったことが考えられる。国内においても景観法という法律が定められ、文化財保護法の中には、保護すべき対象として「重要な文化的景観」というカテゴリーが新たに設けられ

た。人間が歴史の中で自然に働きかけて作り出してきた景観が、保護すべき対象として関心を集めるようになってきたのである。

二

では骨寺村荘園遺跡には、どのような景観が保護されるべきものとして存在するのだろうか。文化財保護の立場からいえば、それは二枚の絵図に描かれた中世の荘園の景観であるが、現在の本寺地区の景観はそれ以後の人の働きかけによって、改変をうけ、形成されてきたものである。そうした歴史の積み重なりそのものが保護の対象である。まずは現在の景観をもとに、そこから絵図の骨寺村の景観を復元してみよう。

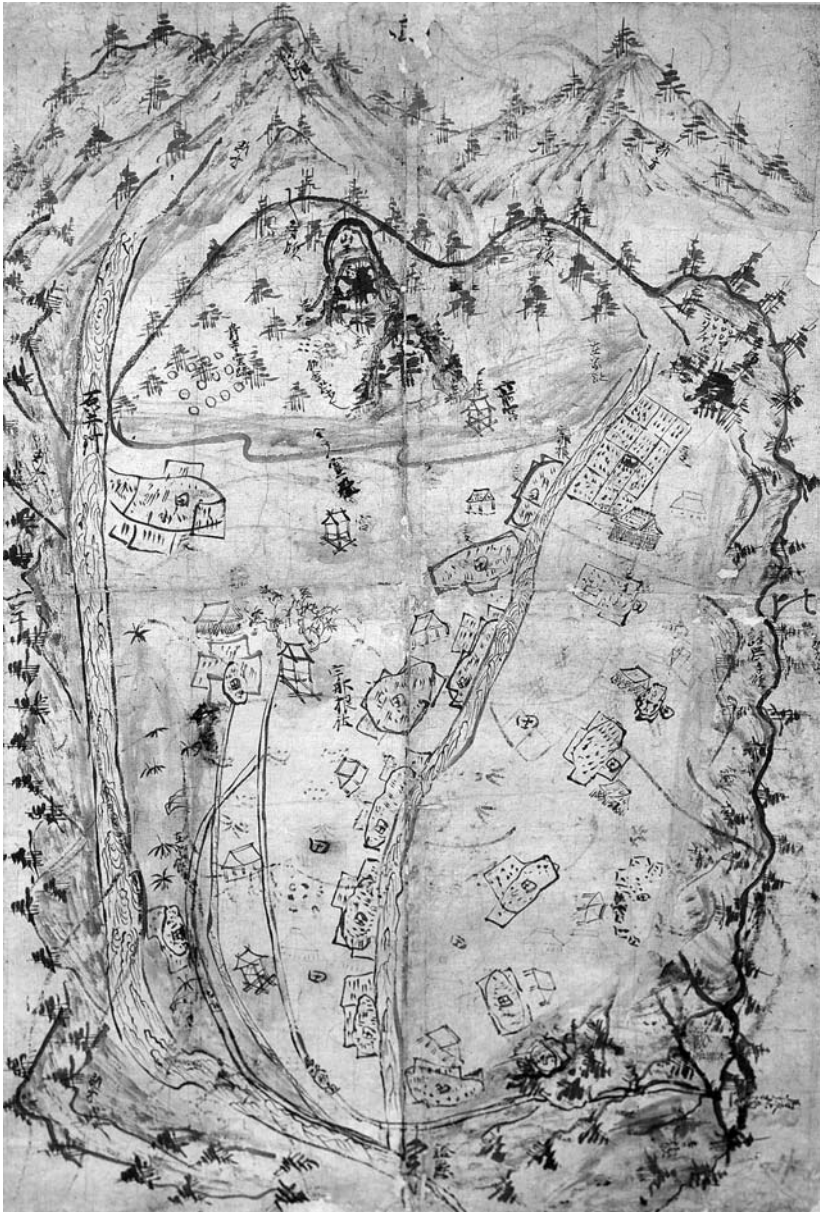
二枚の『骨寺村絵図』には、水田・畠・在家・山・川・道・宗教施設などが描かれており、絵図の骨寺村の景観はこれらの要素の組み合わせによって出来上がっている。一方、現在の骨寺村は農村であり、景観との関わりでいえば、水田がもっとも重要な要素である。それは絵図の時代におい

ても変わりがなかったと推察され、絵図にはその状況が表現されている。

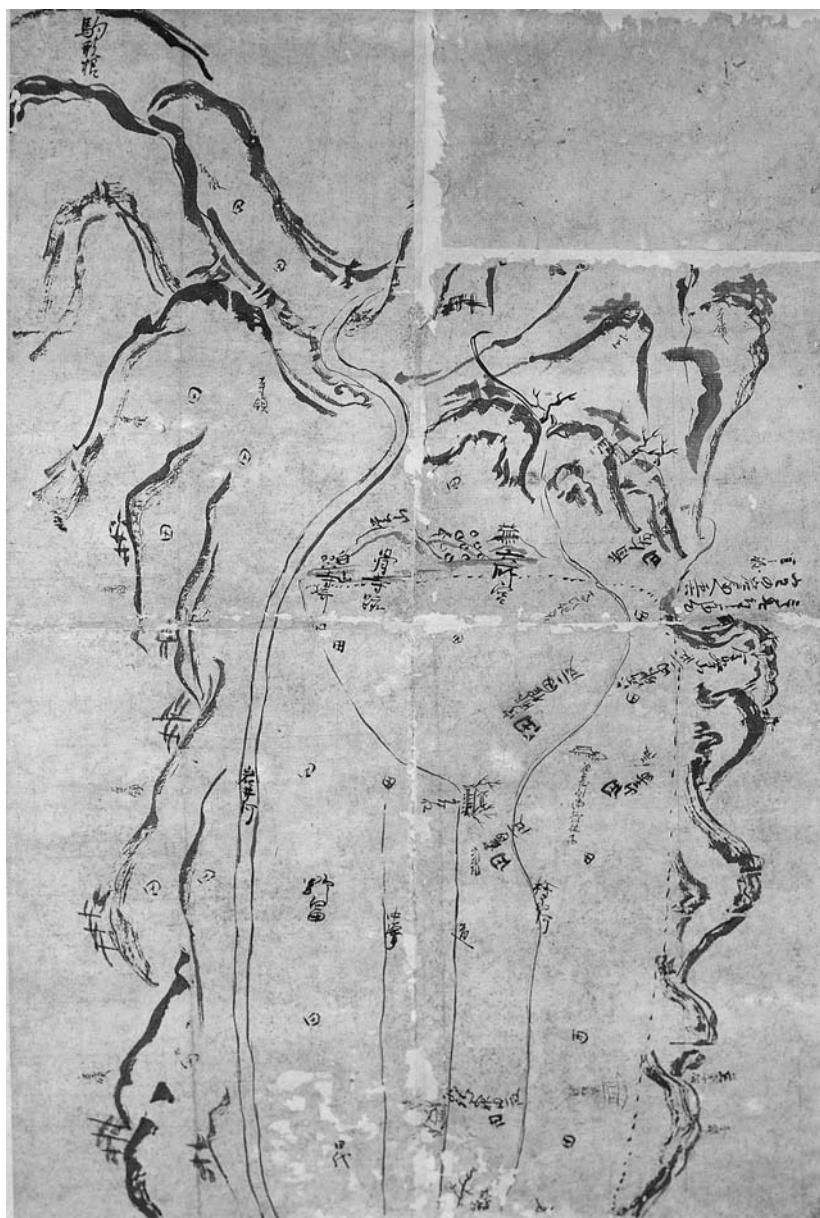
とくに目につくのは、『在家絵図』の水田と在家の図像であり、それによって作り出される独特の景観である。そこでまず『在家絵図』の水稲耕作の復元を手がかりに、絵図の時代の骨寺村の景観を復元してみよう。

『在家絵図』の水田の図像はつぎの五類型に分類される。①北の山沿いに、在家の図像と結びつくような形で塊状かいじょうに描かれている、六個の不整形な水田。なお北は右。この絵図は西を上にしていゝる。②本寺川ほんでらがわ（『仏神絵図』の檜山川ひのやまがわ）の南岸に接する形で描かれている七個の水田。③馬坂新道の南の細い水流（『仏神絵図』の「中沢」の源（湧水点）と思われる）ところ、およびその中流に描かれた不整形の水田。④西の岡の麓に、磐井川の北岸に接して描かれた、大きい不整形の水田。そして最後に、⑤絵図の右上に、本寺川の北岸に直接して描かれ、十二枚に区画された方形の水田である。

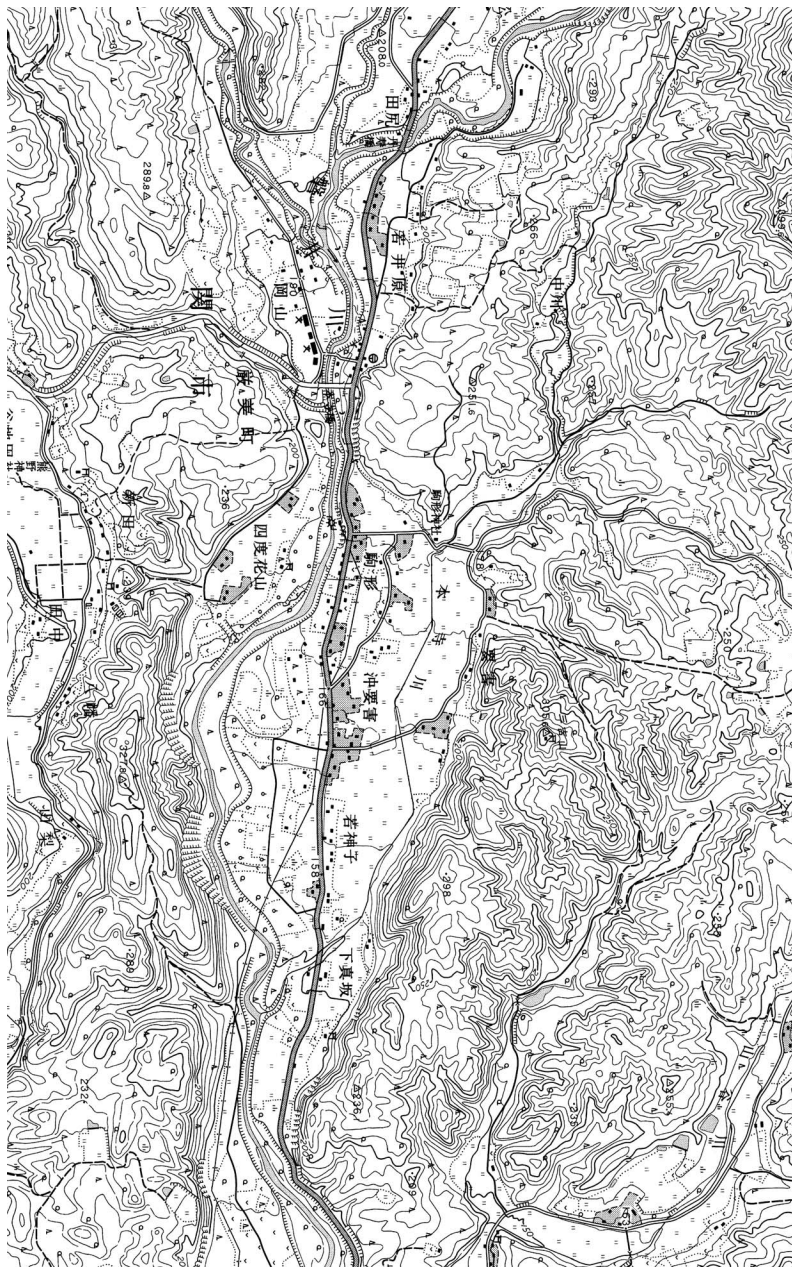
絵図にはこれ以外にも、図像なしで「田」とい



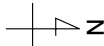
『骨寺村絵図』(『在家絵図』)



『骨寺村絵図』(『仏神絵図』)



『骨寺村絵図』の平地部（西の境の山王岩屋は省略）





本寺地区の平野部の風景（駒形根神社の下から東を見る）
中央は本寺川、北の山の稜線は『仏神絵図』のそれを思い起こさせる。

う文字を記しているところが三カ所あるが、この文字は後からの書き込みで、もともとの絵図にはなかったものである。同様に『仏神絵図』にも「田」という文字がたくさん書かれているが、この中には現在でも水田はありえない場所があり、すべて後筆と判断される。

そうすると『在家絵図』が描かれた時点で、この村に存在した水田はおおよそ①⑤の水田だけだったということになる。現在の本寺地区の平地は、磐井川の近くや住居のまわりを除けば、一面が水田である。中世の骨寺村の平地の景観は、現在のそれとは大きく異なっていたのである。

何故、このようなちがいがあるのか。その最大の理由は、灌漑用水を確保するための技術水準のちがいにある。現在のこの村では、磐井川の水を上流で堰きとめて、長い水路によってその水を村まで引き入れ、駒形根神社の下で本寺川に流し入れる下り松用水や、発電所の余り水などが、灌漑用水として利用されている。村の平地部の全面的な水田化は、それによってはじめて可能になった



駒形根神社 本寺地区の鎮守社。絵図の六所宮はこの奥か。絵図に村の四至外の駒形根（栗駒山）が描かれている理由が推測できる。

のである。しかしこれらの用水は、下り松用水の場合には江戸時代の後期、発電所の用水は大正年間に開発されたもので、中世には存在しなかったものである。長大な用水路を造成する技術力は、中世には存在しなかった。それが中世の骨寺村の耕地の景観を現在とは大きく異なるものとした理由だったのである。以下、具体的に絵図の①②⑤の水田について、それを支えた技術水準を観察し、在家との関係にも留意しながら、村の景観を復元してみよう。

まず①の六個の水田だが、これは北の山裾に並んで存在するもので、用水は北の山裾の湧水を、それぞれ個別に引き入れていたものと推察される。湧き出る水を溜めた沼状の湿地が山根にあり、そこから引いた水で造れるだけの、ひとかたまりの水田が在家の前に存在する。そのような水田と在家が結びついた単位が並んでいる景観が絵図の表現するところと考えられる。

本寺川の南で、駒形根神社の岡の北斜面に、ガバタという名前の屋敷が現存する。ガバタはカバ

タが訛ったもので、蒲田のことである。蒲^ガはカバともいうことがある。ガバタは蒲の生えている湿地のことである。この屋敷の傍らの水田はひとかたまりの棚田状の水田だが、その奥のもっとも高いところには、まさに蒲の生えた沼地が存在する。棚田状の水田はその沼地の水によって灌漑されている。岡の裾の湧水点に存在する沼地とそれによって灌漑されるひとかたまりの水田、その傍らの在家というセツトをここに見ることができると推定される。

ガバタ屋敷の名前は、南北朝期のものと推定される「骨寺村在家日記」という文書に、「一か、はた、六百かり（刈）、ねんく（年貢）一貫文」と記されている。そして同じ文書には「わつ田」「いゝおか」などの名前が見えるが、このワツタ、イイオカ（現在はヨウガイ）は屋敷名として北の山裾に今も並んで存在し、それがこの村の基本的な集落景観の一つをなしている。それはいま述べたような中世の骨寺村の景観にもさかのぼるものである。

これに対して②の中川の南岸に接して存在する水田は、本寺川から水を引いていたもので、①よ

りは一歩進んだ灌漑技術によるものと考えられる。この平地は北が高く南が低い。この水田が川の南側に集中しているのはそのためで、川から水を引くといっても、ひとかたまりの水田ごとに引水の施設があるような簡単な施設によるものであったろう。この水田が①と同様に七個の独立したかたまりとして表わされていて、連続していないのは、そのことを表現しているものと考えられ、灌漑技術としては①とそれほどへだたるものではないであろう。

①ほど明瞭ではないが、在家が水田に接して描かれているのも、①との類似をうかがわせる。現在の本寺地区の集落の一つは、やはりこの在家が描かれている場所に存在する。ハヤシザキ・ナカヤシキなどの名前と呼ばれる屋敷からなる集落が、この本寺川と『仏神絵図』の「中沢^{なかざわ}」にあたる水流との間に存在する。これも山裾の集落と同様に中世にさかのぼるものである。

なおこの集落と中沢の間に、絵図では馬坂新道^{まさか}という道が描かれている。この道は北の山を越え



『仏神絵図』の「中沢」の現況

て村の外に連絡しており、その道筋は現在では失われてしまったが、ハヤシザキ・ナカヤシキ集落の南の部分に関しては今も存在している。

次に③の中沢の源およびその流れにそった水田だが、この水田が中沢の水を水源とすることは容易に理解できる。

この場合も水田の図像のかたわらには在家が描かれており、①の場合に述べたのと同様に、在家とそれに結びついた塊状の水田からなる散居村という景観が、中世のこの村の基本的な景観であったことが推察される。

なお中沢は現在は水田化していて沢ではないが、周囲からは一段低い湿田が連なっている。

おり、かつてはここが沢であったことを推察することができる。

④の磐井川の北岸にそった形で描かれている水田は、一見すると磐井川の水を引いているように見えるが、この村のあたりの磐井川は深い谷をなしており、そこから直接に水を引くことは現在でも不可能である。この水田は西の山裾の湧水によっていたものと推定する。

以上の①～④の水田に対し、⑤の方形に区画された水田は、計画的に造成された、規模の大きい水田であった。先にも述べたように、本寺川の北の土地は本寺川よりも高く、川にそった水田であっても川から直接に水をひくことはできない。井堰せきによって本寺川の水を堰きとめ、そこから水路をひいて水を揚げなければならぬ。実際にこのあたりの本寺川の北には、そのような水路が存在した。そしてそのような用水施設を造るためには、大きい整った計画と、大規模な労働力の集中的な投下が必要である。

またこの水田はきちんと方形に区画されている。



梅の木田遺跡

て、他の不整形な水田とは異なるが、これもまたこの水田が計画的に一挙に開発・造成されたものであることを物語っている。在家が保有する家族労働力によって、個別的に開発されたにちがいない不整形な水田とは大きく異なるところである。

『在家絵図』のこの水田の傍らには、屋根や壁を丁寧を描いた大きい在家がある。この在家ではないかと推定される大型の柱穴をもった建物跡が、発掘によって発見されている。梅木田遺跡である。柱穴の大きさや柱間の寸法からみて、これは農民の在家とは考えられない。荘園経営の中心をなす、政所まんどころのような建物であろう。⑤の方形に区画された水田は、その政所に直属するような田地、領主直営地つくただった可能性がある。鎌倉時代のこの村には佃つくだ（領主の直屬地）があったことが文書から知られる。あるいはこの水田が佃であったのかもしれない。

中世の骨寺村には、①④と⑤という、二つの景観的にも異なる水田が共存していたのである。それがその後の本寺川の水の集約的な利用や、江

戸時代における下り松用水の開発、さらには近代の発電所の建設にともなう新たな用水の開発などによって、全面が水田であるような現在の景観に変わっていったのである。本寺地区の現在の水田の景観は、こうした歴史の積み上げ、人と自然の交流の結果だったのであり、私たちは今、本寺地区の水田の中に立つとき、そのことをつよく感じる事ができるのである。

三

いま述べた⑤の大きい水田の開発の中心人物は誰なのだろうか。私はかつて、この開発を馬坂新道の開削かひさく、つまりこの村を外界と結びつける新しい交通路の開発と結びつけて、この二つの土木事業は同時に行われたものと推定した。その時期は十二世紀。そのための新しい技術と労働力の組織をこの村に持ち込んだのは、この村に天台宗の信仰をもたらし、村を中尊寺に結びつける役割を果たした僧侶、すなわち法華経の聖とどの一人であったろう、と考えた。

法華経の聖は十一・二世紀の奥羽の各地を横行し、天台の信仰を広めるとともに、水田や道路の開発などの作善さぜんを行っていた。骨寺村の開発はそうした聖の活動の一つのあらわれだったと考えるのである。

『在家絵図』には「馬坂新道」と「古道」という二つの道が描かれている。古道から新道へという交通路の改変が、この絵図の作成以前にあったことが確かである。古道は磐井川の崖つぶちにそっていて、ルートは現在の道路（国道三四二号）に近いようだが、『在家絵図』の表現では崖にはりついたような道で、一步誤れば崖から転落しかねない、交通困難な道だったと考えられる。これに対する新道が馬坂新道といわれていることからすると、この古道は馬も通れない道だったのであろう。今の国道が馬車も通れる道になったのは明治初年、自動車を通れるようになったのは、大正年間の発電所の建設のときだったという。

これに対して馬坂新道はその名前からみても馬が通れる道だった。この道の開削によって、この



慈 恵 塚

村は外界に向かって大きく開かれることになった。それと村の水田の開発が同時に行われたのである。法華経の聖がこの村にもたらしたものは、たいへん大きかったといつてよいであろう。

この村は、中尊寺に伝えられた文書によれば、初代の中尊寺経蔵別当の自在房蓮光が「往古私領骨寺」を藤原清衡発願の「中尊寺金銀泥行交一切経蔵」に寄進することによって経蔵領となり、以後、他人の妨げなく永代相伝すべきものとされたという。この蓮光自身あるいは蓮光によって組織されていた聖が、骨寺村の開発を主導した人だったのであろう。

『在家絵図』の馬坂新道が北の山の稜線を越えるところには、積石塚と思われる画像があり、その上には小さなお堂がのっけていて、傍らには大師堂という文字がみえる。そしてそれは『仏神絵図』では「慈恵塚」という文字であらわされている。慈恵とは十世紀の天台座主慈恵大師良源のことである。この積石塚は今もこの場所にあり、その上には石の祠がのっけていて、慈恵大師の信仰を今に

伝えている。

昔、平泉郡にいた一人の女人が法華經の読み方を習いたいと思っていたが、師とするべき人がおらず、歎いていた。ところがあるとき、天井の上から声がして、法華經の読み方を教えてくれた。

習い終わって、天井を見ると、そこには舌が生きている人のようにしている髑髏があった。誰でもあるかを尋ねたところ、自分は慈恵大師の頭である、急ぎわれを逆柴山に送れ、といったという。

『撰集抄』という鎌倉時代の説話集にあるはなしたが、本寺ではそれをこの村のこととして伝え、逆柴山は今の慈恵塚のある山のことだという。慈恵塚は慈恵大師の髑髏を埋めたところ、ということになる。

慈覚大師開基と伝える山形県立石寺の大師入定窟に、人骨とともに頭部だけの木像をいれた金棺が納められていたことが想起される。慈恵塚はおそらく馬坂新道の開削に重要な役割をはたした天台宗の僧侶にかかわりのある塚なのである。新道開削の困難さや、その効果の大きさの故

に、それが超能力の持ち主としても知られていた慈恵大師に仮託されて、今のような伝えを生んだのであろう。

絵図にはこの他にも山王岩屋・白山社・金峰山（地元ではミタケドウという）など天台の信仰と関わりが深いものがいくつも描かれている。六所宮も金峰山と関係が深い。それらは今も村の中に実在し、またはその跡をとどめている。その維持や仏神事のための水田の所在を記すことを目的として、『仏神絵図』は描かれたのである。天台宗寺院中尊寺の寺領の一つであった骨寺村には、こうした宗教施設が網の目のように設けられていたのである。

直接、天台宗の信仰に結びつくものではないが、絵図には字那根社や若神子社の図像、さらには文字だけが鎰懸など、民俗的な信仰の対象であるものも描かれている。字那根社は稲作にとってもっとも重要な用水の神、若神子社は死者の霊を呼ぶ巫女の守護神、鎰懸は村の境界を守り、山仕事ともかわる巨樹の信仰である。峠などの境界に



山王岩屋

立っている巨樹に、カギ状の木の枝を投げ上げて、それが巨樹の枝に懸かるかどうかで吉凶を占う習俗でもある。その場所はまだに骨寺村の東の境界である。これらの習俗・信仰は農業事情などの変化にともなって衰退し、若神子社以外はその存在自体も失われてしまった。しかし絵図の存在によってその場所を推定することは可能であり、それを通して中世の人々の生活に根ざした精神世界の豊かさを窺いみることができる。

骨寺村荘園遺跡は、中世以来の人々が自然と交流しながら作り上げてきた景観を体験できる、まことに希有の場所なのである。世界遺産リストへの登録が実現し、多くの人々にこの村を体験していただきたいと念願する。

(東北学院大学名誉教授)

中尊寺をかざる花、宝相華

ほうそうげ

久保智康

はじめに

中尊寺といえは「蓮」と、どなたもすぐに連想されることだろう。それほどに中尊寺ハスはいまや有名である。しかし工芸史を勉強している私の場合、「中尊寺をかざる花は何か」と問われれば、申し訳ないがそれは「蓮」ではなく、「宝相華」と答えることになる。そもそも本誌『関山』の裏表紙の真ん中に配されているワンポイントマーク。これが宝相華にはかならず、それに「山」字形を白抜きで加え使われている。

平泉が栄えた平安時代後期の日本において、仏の世界を荘厳しやうこんすべくかざられた花は、圧倒的に宝相華なのであった。中尊寺は、その宝相華の流行のただ中に建立された。逆にいえば、宝相華や蓮華など、仏教美術として装飾文様の流れをたどる

うとすると、中尊寺は絶対に避け通ることのできない存在なのである。

小稿では、まず宝相華の初現を確認したのち、中尊寺とそこに至るまでの宝相華を概観して、中尊寺の宝相華が歴史的、思想的にいかなる位置を占めるか考えてみたい。

宝相華という言葉

「宝相華」の語は、中国が故地である。早くも北齊（六世紀）の時代に、仏像のきらきらしい様を「宝相」と形容する例が知られる。しかしその後、隋・唐代にはほとんど宝相華の用例は見られず、宋代になり、「刺花」すなわち実在するイバラ科の花の一種を指して「宝相花」と称したことが確認される（『洛陽花木記』）。また建築の意匠にも用いられ、元符三年（一一〇〇）撰の『營造方式』で「華文に九品有り。・・・二に曰く宝相華」とあり、その割注に「牡丹の華と同類なり」（以上、原文は漢文と述べられる。

ところが日本における「宝相華」というと、じ

つは明治時代になり美術史研究で慣用的に使われはじめたもので、中国の用例とはかなりニュアンスが異なっている。奈良時代から平安、鎌倉時代にかけての美術にみられる花唐草文様を、漠然と宝相華と呼ぶ。これらの花文は実在の花に特定できるものでなく、唐・宋代の中国美術に出自をもつ瑞花文で、ほとんどが仏教美術に用いられていることから、「仏の世界をかざる空想上の花」と説明されることが多い。中尊寺をかざる宝相華が後者に属する花文であることはいままでもない。

中尊寺の宝相華とその淵源

いま一度、裏表紙の宝相華の図をご覧ください。これは金色堂の内陣をよりきらびやかに荘厳するため懸けていた華鬘けまん（口絵カラー写真）の透かし彫りの宝相華からとったものである。上下に二枚、左右に二枚ずつの計六枚の花びらからなり、各々の花びらには涙形、爪形の子葉（図の白抜き部分が表される。これが花を正面の斜め上方から見た形、平安時代後期における定型の宝相華なので

あるが、その淵源は十世紀ぐらいまで遡ることができる。

もと法隆寺に伝来した如意は、銘文から天曆十一年（九五七）に施入されたことがわかる品で、頭部に宝相華が線刻されている。五枚の花びらの配置はすでに定型に近い。また比叡山延暦寺の横川よかわに籠もり法華経を写経した慈覚大師円仁にちな



金銅宝相華文如意の宝相華 東京国立博物館蔵

み、藤原道長の娘で一条天皇中宮の上東門院彰子（じょうとうもんいんしょうし）が長元四年（一〇三二）に法華経を納めて地中に埋納した品と見られる金銅経箱にも宝相華が全面に線刻されているが、これはもう六枚の花びらがほぼ定型の姿をとって描かれている。注目していただきたいのは、これらの花びらの形である。中尊寺の宝相華と比べると、一枚一枚が丸みをもってふくよかなことにお気づきであろう。

文様というのは、ひじょうに長い間、描きつづけられるもののだが、古い図柄を写すことを繰り返していくと、その文様はしだいにパターン化し、



金銅宝相華文経箱の宝相華
延暦寺蔵

萎縮した感じになることが多い。右にみた古い宝相華は、いかにも仏の世界をかざる花らしく、いきいきと躍動感に満ちて表現されているのである。

平等院と中尊寺の宝相華

中尊寺の宝相華により近いのは、宇治平等院の宝相華である。本堂である鳳凰堂は、藤原頼通により天喜元年（一〇五三）に建て始められた建物で、あちこちに宝相華が散りばめられている。その中でも、本尊阿弥陀如来坐像の頭上の天蓋（てんがい）に透かし彫りされた宝相華が最も精美な作例である。延暦



平等院鳳凰堂天蓋の宝相華

寺経箱から二〇年ほどしか経ていないこともあって、六枚の花びらの配置はもとより、縦、横の比率までほとんど変わらない。しかしわずかながら花びらが小さくなり、木彫ということもあってか、締まったシャープな印象を与える。

これと、口絵の華鬘の宝相華と比べていただきたい。とくに迦陵頻伽かりょうびんがの上の宝相華など、ほとんど瓜二つであるのがお分かりであろう。この華鬘は、藤原初代、清衡が天治元年（一一二四）に金色堂が建て始めた当初の品であるので、鳳凰堂からは七〇年ほど後のものである。それだけの長い年月を隔ててもこれだけ似ているということは、「金色堂華鬘の宝相華は鳳凰堂の宝相華を写した」と考えた方がいい。

平等院を写す

なぜこのようなことが起きたのだろうか。じつはこの頃、京都の公家や僧たちも、新たに寺を建てる際に平等院を第一に参照する、ということがしばしばあったのである。例えば、長承三年（

一三四）に造営が始まった京都・鳥羽の勝光明院御堂の天蓋・宝幢は、平等院のものを写して製作された『長秋記』。また仁平元年（一一五二）造営の宇治小松殿の新御堂天蓋も平等院天蓋を写したものであった（『左兵衛尉仲行書状』『平安遺文』四七二九）。いずれの場合も、絵仏師と呼ばれた職人が平等院のものを写して絵様（下図）を描いたことが史料から知られ、それをもとに、餽仏師かきぶつし（天蓋や光背など木彫を行う職人）や餽師（華鬘や飾金具など金工を行う職人）が実際の製作にあたったのである。中尊寺金色堂の華鬘を製作された際にも、同じようにして、平等院の華鬘・幡・天蓋など荘嚴具の宝相華が意匠として参照された可能性が高いと私は考えている。

そもそも、中尊寺をはじめとして平泉に造営された諸寺院は、平等院の要素を直接、間接に取り入れている。二代基衡の創建になる毛越寺の金堂や、三代秀衡の創建になる無量光院の本堂は、鳳凰堂のごとき左右に張り出す翼楼をもっていた。とくに後者は本尊丈六阿弥陀如来や堂内の扉絵、さらに前の園池まで含めてことごとく平等院を模

したといわれる(『吾妻鏡』「寺塔已下注文」。これ以外にも、阿弥陀の浄土世界を顕現すべく、阿弥陀堂や園池などが中尊寺をはじめとして各寺院に次々と作られていったのだが、それら諸要素の中心たる手本となったのが平等院なのである。

藤原氏歴代の遺体(秦衡は首級を須弥壇内に納め、壇上に阿弥陀如来と地藏菩薩を安置した金色堂は、歴代が阿弥陀浄土へ往生することを願うべく、堂内空間そのものを浄土にできうる限り近づけんと莊嚴の限りを尽くしていた。そのような莊嚴具の華鬘意匠であるからこそ、平等院の宝相華を直接参照する意味があったのである。

金色堂須弥壇金具の宝相華

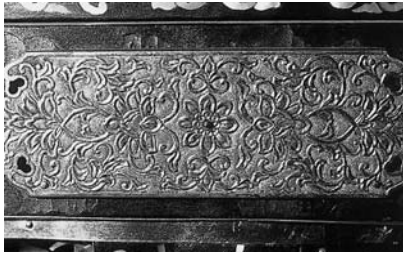
金色堂の須弥壇は、よく知られているように、最初に中央の壇が作られ、清衡の遺体が安置された。その後、左右の壇が作られ、基衡、続いて秀衡の遺体が安置されたのである。中央壇のかまち櫃に打たれた八双金具の宝相華は、三枚の花びらが左方に重なっているので見にくいのが、華鬘のそれとは

とんど同じで、やはり平等院の定型宝相華をきちんと写している。

ところが、時期が降って付設された、向かって右脇壇の宝相華はどうだろう。かろうじて花びら六枚の形は留めているものの、各花びらは小さく萎縮し、逆に各子葉が肥大化している。また真ん中の三枚の小さい花びら(もしくは子葉)は全く形を変えて花薬形かすいがかたになっている。この壇は、最近の研究では二代、基衡を安置した壇という見方が有力になっている。とすれば、彼が亡くなったとされ



中央壇八双金具の宝相華



向かって右壇八双金具の宝相華

る一一六〇年前後までの三十数年の間に、定型の宝相華は著しく変形をきたしたことになる。

注目すべきことに、写真の定型宝相華の右側にある中央花文が、中央壇では花びら四枚だったものが、右脇壇では八枚花びらの蓮華のような花文に入れ替っている。したがって、後者が前者をそのまま写したとはおよそ考えられない。十二世紀の間に、中尊寺とは別の場所、おそらくは京都で、平等院の定型宝相華の変容が著しいまでに進行しており、それを右脇壇の八双金具は写したものと思われる。

中尊寺の宝相華、その後

小稿では、六枚花びらの定型宝相華を軸に話しを進めてきた。申し添えておかねばならないのは、それ以外にもじつに豊饒な宝相華の世界が中尊寺で展開した、ということである。金色堂の扉に打たれていた八双金具が一枚だけ残っていて、いっそう躍動感のある八枚花びらの大ぶりの宝相華が彫金される。これにそっくりの宝相華は、清衡が



金色堂扉の八双金具

発願した紺紙金銀交書經の表紙に見ることが出来る。また金色堂の内陣の虹梁・長押・組物・柱の全面に螺鈿で表された宝相華は、金工・彫刻にみる宝相華と雰囲気を異にする図様である。

「写す」という作業を通して、それぞれに少しずつ形を変えていった。これらに少しず

つ形を変えていった。それにして、もくだんの定型宝相華は、飭関係の工房の間でよほど知



紺紙金銀交書經の表紙



華相の宝の華鬘の神輿神社幡八淵頼

られたテキストだったようで、ひじょうに長い命脈を保った。奥州藤原氏が滅亡した直後、十二世紀末頃に製作された神輿（和歌山県頼淵八幡神社蔵）をかざる華鬘には、まだしっかりとした定型宝相華が透かし彫りされる。南北朝時代には「唐花」と呼ばれる花文となり仏教以外の工芸意匠にも用いられるようになったし、室町時代に入っても、すでに主流となっていた蓮華と混交しながら経箱などの意匠として名残を留めた。

中尊寺の宝相華は、以上にみた数百年におよぶ定型宝相華の流れの出発点である平等院鳳凰堂にならったもので、幸いなことに私たちは、いまもその精美な姿を観ることができ、凝視しなけれ

ばわからないほど小さな文様ではあるけれども、平泉の地に阿弥陀浄土の世界を作り上げようとした藤原初代、清衡の想いを汲み取ることができるといふことを強調して、擲筆したい。

（京都国立博物館工芸室長）

〈参考文献〉

- ・石田茂作・蔵田蔵他『中尊寺』朝日新聞社 一九五九年
- ・加島勝「金色堂の荘厳と中尊寺経の軸端金具」『天台宗開宗一二〇〇年記念 最澄と天台の国宝』京都国立博物館・東京国立博物館・読売新聞社 二〇〇五年
- ・菅野成寛「平泉の宗教と文化」『平泉の世界』高志書院 二〇〇二年
- ・久保智康『金色のかざり―金属工芸にみる日本美―』京都国立博物館 二〇〇三年
- ・中野玄三他『日本美術全集7 浄土教の美術 平等院鳳凰堂』学習研究社 一九七八年
- ・林良一『東洋美術の装飾文様―植物文篇―』同朋舎出版 一九九二年
- ・藤島亥次郎・鈴木友也他『中尊寺』河出書房新社 一九七一年

人生の応援団

—「土日説法」断想

千田孝信

坊主は人生の応援団であれ！これはかねてからの持論だった。監督になつてはいけない。応援団がいい。

世間のひとりびとりと、人生航路の浮き沈みでの喜怒哀楽を共にしながら、ときには「落ちこむんじゃないよ。朝のこない夜はないんだ」と励まし、ときには「努力したお陰だね。だが傲むっっちゃいかんよ」といましめる人生の応援団でありたい。

土日説法はその絶好の機会チャンスを提供してくれたわけだ。張り切って始めたが、やってみると正直の話キツかった。七月には土日が十回もあったのだ。しかし引き受けたからには全回自分でやり通すこと、その都度新しいテーマでお話すること、持ち時間六十分を守ることの三つを自分に誓

った。

話題については、一つには折からの義経関係、二つには人生一般、三つには仏教とくに平泉文化の三本の柱を建てて大まかな段どりをきめたが、あとはその時次第の出まかせ、よくいえば自由自在でゆこう。

この期間中、伝教大師・清衡公・泰衡公のご命日などが含まれていたのは不思議なご縁だった。

まさか「貫首の土日漫談」と掲示するわけにゆかないから、「説法」という形にしたが、本人は漫談のつもりだった。布教意識は最初から捨ててかかった。遠方からの参詣客が一時間も難しい「お説教」を聞かされたら、たまったもんじゃなからう。「むずかしいことをやさしく。やさしいことを重く。おもいことをおもしろく」の井上ひさし流でゆくつもりだった。仏教術語は出来るかぎり使わない。

思うようには運ばないのが世の常。なにぶん場所が本堂、ご本尊さまのお膝元なのだ。緊張している顔を、どうしたら乗せて崩せるか。笑い合う雰囲気は自然に醸成されるのには一定の人数が要ることが分かった。

時間が惜しいので、板書したい文字は半紙に墨書して用

意した。話の合間に総務の女子職員が折角運んでくれたお茶も、一滴すら口にできなかったのは申し訳ない。それくらいノメリこんだというわけ。

多くの方々から陰に陽に賜った深厚のご高配ご支援には、ひたすら手を合わせるばかり。終わった時点で執事長が一冊の本にと言ってくれたが最初からその気はなかった。すべて「鳥飛んで鳥跡を残さず」がいいのです。

(中尊寺貫首)



4月30日、第1回目のようす。



毎回多くの方々が聴聞された。

貫首の土日説法 カリキュラム

No.	平成17年	演 題	副 題
1	4月30日(土)	鳴かぬなら 共に鳴こうよ ホトトギス	(義経公御命日)
2	5月1日(日)	みかえり なんて いらぬよ	無功德の仏法
3	5月7日(土)	生かさされて 生きる	自力と他力
4	5月8日(日)	見えないけれども あるんだよ	形而上のリアリティ
5	5月14日(土)	親がなくても子は育つ	常磐御前の涙
6	5月15日(日)	人生は感動だ!	感動して泣かなきゃ!
7	5月21日(土)	われは風なり 光なり	ある墓碑銘
8	5月22日(日)	それを言っちゃ おしまいだよ	フーテンの寅と 発します
9	5月28日(土)	分け入っても 分け入っても 青い山	一所不住の山頭火
10	5月29日(日)	みちのくに いきるよろこび あらたなり	曲水の宴と歌会始
11	6月4日(土)	ひかり伝えよ 法のともしび	(伝教大師御命日)
12	6月5日(日)	われらと衆生と みな共に	大乘仏教がめざすもの
13	6月11日(土)	あっ 危ない!	まず利他 あとから忘己
14	6月12日(日)	生かしあいの 人生	弱肉強食ではない
15	6月18日(土)	お父さん ありがとうございます	泣かせるよ 貧乏大家族!
16	6月19日(日)	歌はこころで歌うもの	落ちこぼれに寄せる愛
17	6月25日(土)	これは 俺の糸だぞ!	切れた蜘蛛の糸
18	6月26日(日)	マイナスをプラスに	山里は生活の知恵の宝庫
19	7月2日(土)	矢おもてに立つ	佐藤継信・忠信の純忠
20	7月3日(日)	本音と建前	本音だけじゃ危ないよ
21	7月9日(土)	失敗をおそれない	人生は試行錯誤だ
22	7月10日(日)	ほめられた ひとこと	形見に歌集を遺して
23	7月16日(土)	こだわらないで こだわる	色即是空 空即是色
24	7月17日(日)	怨みからの解脱	(清衡公御命日)
25	7月23日(土)	義経の悲しみ	とどかなかった 腰越の声
26	7月24日(日)	ときには他人のために祈りなさい	四字言の仏教
27	7月30日(土)	咲いてね 咲いてね!	八百年の眠りから覚めて
28	7月31日(日)	ゆく道は いずれの里か 土まんじゅう	酒井阿闍梨は今日もあるく
29	8月6日(土)	ノウ モア ヒロシマ	(広島原爆忌)
30	8月7日(日)	お人よしだった義経	義経の落とし穴
31	8月13日(土)	お母さん 太っ腹だね!	こどもは 見ている
32	8月14日(日)	玉音放送を どこで?	わたしの 8月15日
33	8月20日(土)	もったいない	地球と人類へのまなざし
34	8月21日(日)	そのまんまで いいんだよ	仏さまからの メッセージ
35	8月27日(土)	ところが くせもの	ころは 手に籠める
36	8月28日(日)	平泉から世界へ	平泉文化のメッセージ
37	9月3日(土)	ハスの花となって成仏	(泰衡公御命日)
38	9月4日(日)	みんな み手のなか	四字言の仏教 (続)
39	9月10日(土)	戒律というブレーキ	煩惱というアクセル
40	9月11日(日)	仏さまの まなざし	智慧と慈悲
41	9月17日(土)	みちのくの土となって	(経清公御命日)

*義経公ご命日から経清公ご命日までの特定期間

〈緊急アピール〉 衣川遺跡群の保存を!!

新発見・衣川遺跡群と

源義経の「衣河館」

— 泉三郎忠衡の『家』はどこか —

菅野 成 寛

遺跡発見のいきさつ

藤原氏の古都、平泉と郡境を接する岩手県衣川村（本年二月二十日より衣川村と二市二町が合併し、奥州市）から、十二世紀の平泉時代につながる重要な遺跡の数々が相次いで新発見され、源義経の「衣河館」（ころもがわのたち）ではないかと騒がれている。

岩手県の南部地域に位置する衣川村は、今でこそ農林業を主な生業（なまひ）とする人口約五、三〇〇名ほどの長閑（のど）かな山里だが、古くは延暦八年（七八九）の蝦夷アテルイに対する侵掠戦争の記録に、「衣川宮」（たむろ）（宮とは宿营地）として早く

も歴史に登場。陸奥の豪族、安倍氏の著名な前九年合戦（一〇五一—一〇六二年）の折には、その安倍氏の衣川関や一族の瀬原柵などが構えられ、さらに十二世紀の平泉藤原氏の時代、歌人の西行が特に衣川の地を訪ねて歌を詠み、また源義経が匿（かくま）われたりするなど、衣川村は歴史の旧跡として知られた所だ。



図1 衣川遺跡群の位置図

なかでも右の前九年合戦は、安倍氏が郡境河川の衣川を南の平泉側に越境したことで開戦となった、陸奥の中世の開幕を告げる象徴的な事件であったが、実はその衣川の北岸から、突如として十二世紀後期の都市平泉の姿を彷彿とさせる遺跡の数々が新発見され、周囲を大いに驚かせた。

これまで衣川村において、なぜかその永い歴史に相応しい遺跡が発見、調査されたことはほとんどなく（僅かに長者ヶ原廃寺跡調査がなされた程度であった）、ましてや十二世紀の藤原氏時代の遺跡が見つかることなどなかったからである。発見の第一報は昨年（二〇〇五年）五月のこと（岩手日報、五月二十四日付朝刊）、驚きと期待は日増しに高まっていった。

衣川村で遺跡が発見されたキッカケは、衣川の堤防建設工事だった。国土交通省岩手河川国道事務所による堤防工事に先立ち、同事務所の委託を受けた岩手県教育委員会（生涯学習文化課）が、建設用地の試掘調査を複数箇所で行ったが、遺跡の確認までにはいたらなかった。ところが、この調査結果をうけて、同委員会の委託を受けた（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが本調査を開始し

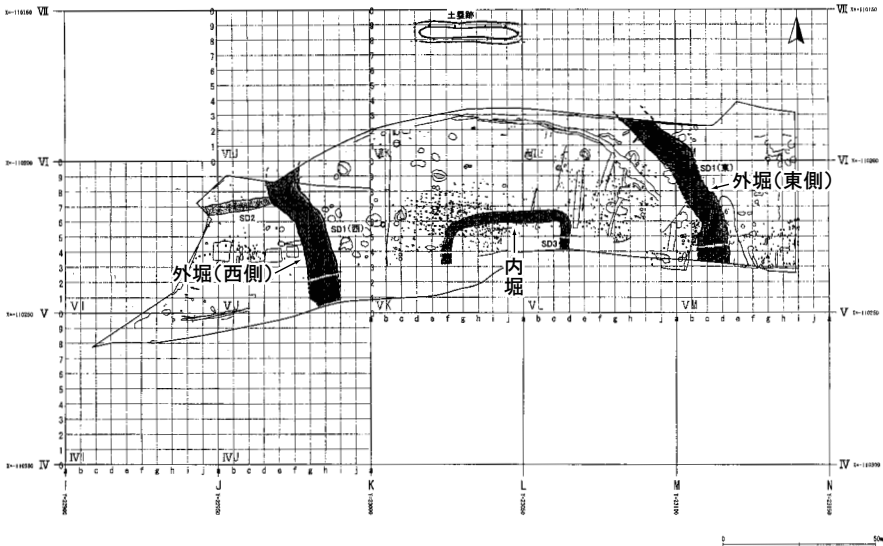


図2 接待館遺跡の二重構造の堀（現地説明会配布資料より）



写真1 接待館遺跡の大堀断面（東側）



写真2 ←が内堀のカワラケ層

て間もなく、十二世紀後期の巨大な二重堀や庭園跡、多量の土器類カワラケなどが続出し、大騒ぎとなった。岩手県教育委員会による事前の試掘調査は、遺跡の存在を完全に見逃していたのだった。

遺跡群のなかみ

— 平泉・柳之御所遺跡に匹敵 —

問題の衣川遺跡群は、中尊寺の北麓を東流する衣川に隣接し、国道4号線に接続する形で、東から六日市場遺跡、細田遺跡、接待館遺跡、そして衣の関道遺跡の4遺跡を数え(図1)、遺跡全体の面積は約三七、〇〇〇㎡(約一一、〇〇〇坪)という、実に広大な遺跡面積を占めている。

これら4遺跡のうち、特に注目すべきは接待館遺跡と衣の関道遺跡の2遺跡であろう。まず、接待館遺跡^{せつたいくわん}で目を見張るのは、巨大な二重堀の存在だ(図2、写真1)。上幅約八m、深さ約二mの外堀と上幅約三m、深さ約一・五mの内堀によって堀が二重構造となっており、内堀の内部から十二世紀後期の大量の土器^{カクラゲ}(写真2)や中国産の白磁・青磁・青白磁片、国産の渥美・常滑陶器片などが発見された。

このような接待館遺跡のあり方と立地は、本遺跡と同様に、北上川に隣接した平泉・柳之御所遺跡と強く共通するものが認められ、この二重堀の主はおそらく平泉藤原氏一族か、それと同等クラスの人物が推定できよう。ところが

残念なことに、巨大な二重堀の中心部分は衣川の長期間の侵食作用で失われ、居館と見なされる中心建物の実態を解明することはできなかった。しかし、二重堀の北側の残存部分から、建物跡の北端部分がかろうじて発見される可能性はまだ残されている。

次に、衣の関道遺跡で驚かされるのは、右の接待館遺跡と同じ十二世紀後期の庭園跡の一部が発見されたことである(写真3)。その大部分は調査区域外に存在するものの、庭園跡の規模は柳之御所庭園遺跡に匹敵するか、それを凌ぐ。

しかも、景観が何よりも素晴らしく、柳之御所遺跡の眺望をはるかに上回る。背後と右側面を三峯山と関山とによって抱かれ、はるか前方に東稲山を遠望する、まさに一等地。十数棟の建物跡や陶磁器片も検出され(写真4・5)、さらに庭園跡に伴う主要建物跡(調査区域外に存在)の発見も期待できそうだ。おそらくこの庭園跡の主も、接待館遺跡と同様、藤原氏関係者であったに違いない。

衣川の北岸に設けられた政治居館的色彩の濃い接待館遺跡と、私邸的色彩あいの強い衣の関道遺跡。両遺跡の関係は、



写真3 窪みが庭園跡の一部

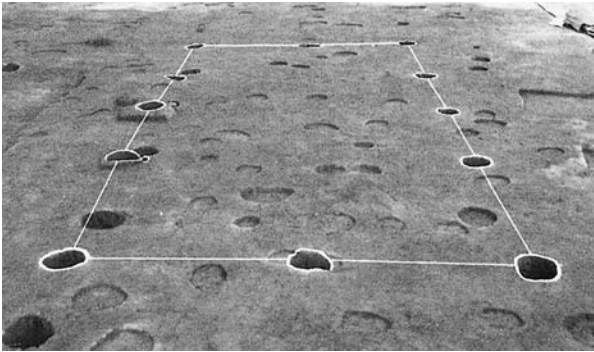
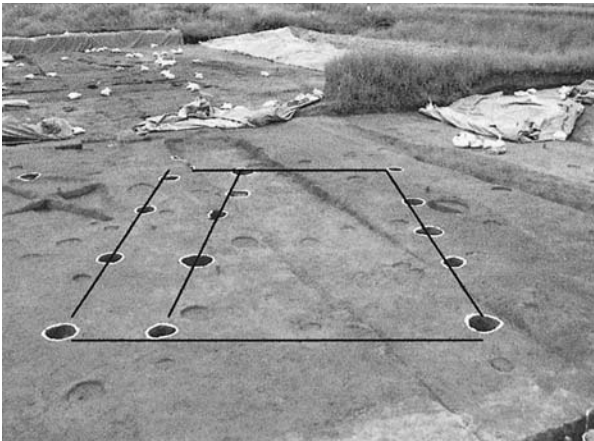


写真4
調査で見つかった
掘立柱建物跡の様子



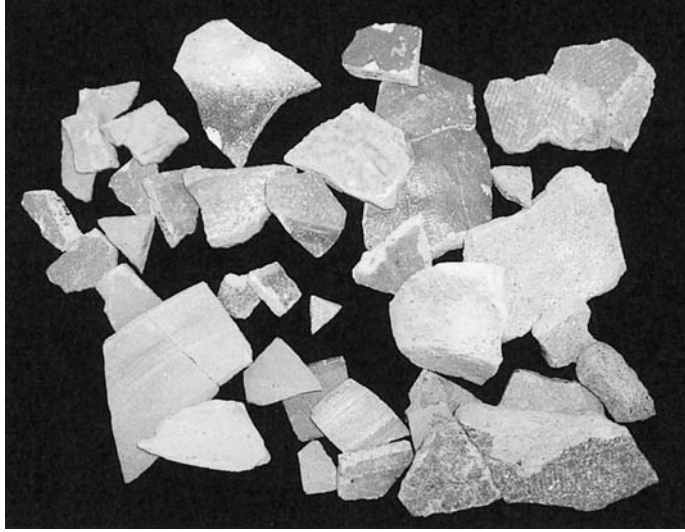


写真5 国産の陶器片

北上川に隣接して都市平泉に営まれた三代藤原秀衡の平泉館いずみのたち（政治施設）と伽羅御所から（私邸）の関係ともよく似通っているよう。鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』あづまがたみによれば、三

代秀衡の舅、元陸奥守・藤原基成もととなりの居館を「衣河館」ころもがわのたちと称し、源義経を匿っていたという。基成や義経であれば、まさしく藤原氏と同等クラス。右の2遺跡の内容から、歴史の研究者たちが、これを「衣河館」ではないかとして、色めき立ったのも無理はない。

遺跡群は果たして衣河館か

— もう一つの可能性 —

では、三代秀衡と四代泰衡の時代、衣川地域に居住したのは源義経や藤原基成だけであつたらうか。そのヒントが、平泉の都市構造にあつた。

平泉は、南北に長大な奥州社会の中心に位置し、その南北社会を結ぶ奥大道おくだいどうの結節点として都市的繁栄を誇つたが、この奥大道が縦貫した都市平泉の南端と北端には当然ながら検門、木戸が構えられ、南北社会から行き来する一人一人を厳しくチェックしたはず。都市平泉の南端の検門（実際は西端、西門）として毛越寺南大門の近接地、そして北端の検門（北門）として衣川の渡河地点が浮かび上がる。

まず、西門の候補地として、三代秀衡の長男国衡の伝承が伝わる国衡館跡が毛越寺に隣接して存在し、建物跡や上幅約一〇mの巨大な堀跡も発見されている。『吾妻鏡』によれば、長男国衡と四男隆衡の家は平泉の西木戸の位置に構えられたというから（従来、この西木戸を、平泉館の西木戸とする説が主流であった）、伝承地とも一致する。

では、北端の木戸、検門（北門）はどこか。それが衣川の渡河地点と推定されるのであれば、今回発見された接待館遺跡こそがその有力な候補地となる。都市平泉をガードする重要な北の検門地点に、賓客の義経や基成だけを居住させるはずは絶対がない。都市平泉の西門に位置した国衡や隆衡と同様、必ずや藤原氏一族の誰かが北門に配置されたとはいえないのである。

『吾妻鏡』によると、四代泰衡（秀衡二男）は平泉館を拠点とし、国衡（長男）と隆衡（四男）が西木戸に居住したのであるから、残るのは三男の忠衡（泉三郎と称した）だけとなる。『吾妻鏡』は、忠衡の「家」を「泉屋の東に在り」とだけ記し、残念ながら所在地を明記していない。

今回の衣川遺跡群の発見で、平泉の都市域が衣川村にまで

拡大するのであれば、接待館遺跡はその北門の有力な候補地と見なせよう。

衣川村には、忠衡伝承をもつ和泉城跡（未調査）も存在し、立地も衣川遺跡群にほど近い。衣川と泉三郎忠衡との関わりは、幸若舞「和泉か城」に初めて見え、永禄八年（一五六五）正月五日の『言繼卿記』（権大納言・山科言繼の日記）に、「曲舞（幸若舞の源流）……秀衡（和泉か城のこと）」とあるから、衣川の忠衡伝承は中世に遡る古くからの伝承と見なされる。衣川村に残る藤原氏伝承のなかで、中世にまで遡るのはこの忠衡伝承だけである。

今回発見の接待館・衣の関道の2遺跡を、義経・基成の「衣河館」の可能性に加えて、秀衡三男忠衡の居館、都市平泉の北門にあたる可能性を推定したい（もちろん、2遺跡の一方が衣河館で、残る一方が北門の可能性もある）。

また、『吾妻鏡』によれば、都市平泉における北方の鎮守として今熊野社と稻荷社が設けられたといい、この両社が衣川地区に存在した可能性はきわめて高い。さらに、三百余坊とされる中尊寺の里坊も営まれていたはずである。

これに加えて、衣の関道遺跡の近接地には衣川柵伝承をも

つ並木屋敷跡が存在し、ほぼ直角形をした古代的な形の土塁が残り、前九年合戦における安倍氏の衣川関跡の可能性を強く示唆している。衣川村一帯の、今後の発掘調査がますます楽しみとなってくるのである。

衣川遺跡群の保存を

右の2遺跡が果たして衣河館か、それとも忠衡の居館かは今後の発掘調査に委ねるとして、その価値が、平泉・柳之御所遺跡にはば匹敵することは多くが認めるところとなりつつある。しかも、この2遺跡の間には広大な未調査地区が横たわり、今後、何が発見されるか計り知れぬものがある。

衣川遺跡群に関する慎重な調査と遺跡保存が強く求められる所以であり、もし遺跡破壊となれば、平泉の世界文化遺産リスト暫定登録すら抹消されかねない。文化庁や国土交通省、岩手県教育委員会を始めとする関係諸機関における英断に心から期待し、衣川遺跡群の保存を強くアピールしたい。

なお、昨年（二〇〇五年）八月十八日には平泉文化研究会（代表・大石直正東北学院大学名誉教授）、岩手史学会（会長・佐藤芳彦岩手大学教授）、岩手考古学会（会長・沼山源喜治北上市埋蔵文化財センター前所長）の歴史・考古学研究者四十名が現地を見学し、関係諸機関に連名で要望書を提出。また、その間、右の3学会それぞれも同様の要望書を個別に提出。さらに、十一月十二日には衣川村保健福祉センターを会場として衣川遺跡群研究会が開催され、入間田宣夫（東北大学名誉教授）、斉藤利夫（弘前大学教授）、伊藤博幸（水沢市埋蔵文化財センター所長）、羽柴直人（岩手県埋蔵文化財センター）、福島正和（同センター）、鹿野里絵（衣川村教育委員会）各氏による研究報告がなされた。これに続いて本年一月二十八・二十九日には、岩手考古学会第35回大会「古代末期から中世前期の居館と宗教―衣川遺跡群と長者ヶ原廃寺―」が、サンホテル衣川荘で開催され、坂井秀弥（文化庁）ほかの研究報告がなされ、衣川遺跡群の性格に関する活発な議論がかわされたところである。

「危機的世界遺産」紀行

佐々木邦世

「日本の文化、文化財を考えると、分母に東アジアをおいてみる必要がある——」平山郁夫画伯、「世界文化財赤十字構想」提唱者としての提言である。

カンボジア

シエムリアップ国際空港の舎屋は、そう、大船渡駅か釜石駅に着いたような印象で、街路はまだ舗装されていない。

翌朝、日本語ガイドの通称トム（登夢）さんに随いて、アンコール・トムから廻った。昨日から感じていたのだが、カンボジアに入ってから、人込みの中を通っても高声を聴かない。この国の国民性なのだろうか、少し元気がないようにも思われた。案内のトムさんの声も低い。まあ、どこかの国の観光地のように、甲高い声を張り上げたりしない方が却って、話を聴こうと、みな彼の側に近寄っていくからそれでいい。物静かな口調で好感のもてる青年である。ANGKORはアンコール王朝、「トム」は都。そこで



アンコール・トム 観音塔

トムさんが「わたしの都城、ではありません」と。これがただ一度彼の口から出たジョーク。

堀をわたり、象や蓮・蛇・獅子の像を見ながら、天女の彫像を拝し、勝利（凱旋）の門から葬送の門と案内された。

石積みみの壁面に戦士の長いレリーフ（浮き彫）が続く。

「この顔がクメール人で、鬚を蓄えたこちらは中国系。戦争になると兵だけでなく家畜もみな一緒に動いた」様子をよく伝えている。屈折した狭い通路を行くと、笛の音が聞こえてきて、地雷で足を失った物乞いが手を伸ばしてきた。

象のテラスを巡り、「あのー木 なんの木」のモンキーパードの樹を眺めながら、タ・プロームの廃墟に向かう。

車を降りてから、道沿いに樹々の標識を見て尋ねると、トムさんが教えてくれた。ベング（BENG）という木は、黒檀のように黒く固い稀種。チューティール（CHHEUT EAL）の樹は、船材などに向き、樹液が木肌を濡らしている。熱心なトムさんはその樹液にライターで火を点けてみせた。樹皮にそって樹液が燃え出した。

（そこまでやらない方がいいと、一言）



タ・プローム（ガジュマル樹木）

タ・プルームに来て、樹のことに関心をもったのは理由があった。それは、「危機的世界遺産」の象徴とされる、カンボジア遺跡破壊の樹根のことが頭にあったからである。われわれが印刷物や画像で見ているのは、ガジュマル樹である。ガジュマルという呼称は、沖縄などでそういわれているが、標識にはスパンング（SPUNNG）とある。漢名「榕樹」である。そして、他にどんな樹があるのかも訊きたかった。

倒壊した石塊を渡って廓内に踏み込んだ。

空から垂下したような太い樹根。その隙間から石像の顔だけが見える。樹根の網が構造物を覆い潰している。

「危機的世界遺産」の現実を目の当たりにして、人為とか自然、時間——そんな単語を断片的に見つけても言葉にならない。崩落したままの石と石との間にできたわずかな隙間があった。

腰を折って中を覗くと、淡いランの花が咲いていた。

*

午後は、アンコール・ワットの見学である。



アンコール・ワット

「ワット」は、靈廟、寺院のことです。西を向いて建っていますから、午前中に正面から建物外観の写真撮っても逆光ですね。だから、午後の方がー。
トムさん、正しい。

広々とした叢くさむらのなかに、一面に睡蓮の池がある。そこから、ワットの五塔全てが見える角度が記念写真の定番。

仰ぐと、中央塔の急な石段を登る観光客も何人か見えたが、(事故っても保険は対象外と聞いて) われわれ一行の中にはだれもその勇氣はない。

数百メートルにもなろう長いレリーフ。ヒンドゥー教の祖先崇拜・偶像崇拜の所産で、天国と地獄、戦士の列がどこまでもつづく。一二世紀前半の遺構である。

日本では、陸奥国のほぼ中ほど衣川の南に、藤原清衡が中尊寺の堂塔を建立した同じ時代である。しかし、清衡は度重なる戦争で命を落した霊を、敵味方の別無く浄利に導かんと、城郭でなくて寺院堂塔を造営して『供養願文』に非戦の志を述べた。その平泉の遺産を思いこれを見ていると、所々にポルポト内戦時代の弾痕があって、二一世紀に



レリーフ（戦士の後方には、お産や病いの場面も）

引き戻される。

外周りの叢くさむらに、五色幡はたが緩ゆるやかに舞っていた。

三々五々にバスに戻る途中、トムさんがこんなことを漏らしてくれた。「まだまだ貧しくて、何かくださいって手を出す児います。でも、それでお金やると、その児は学校に行かないでお金もらった方がいいと思ってしまう。ただ、明日行く、トンレサップ湖畔には本当に貧しくて、髪洗う石鹸もない児たちが、いっぱいいます。」

*

いよいよ、期待していたプノンバケンの夕陽を観に登る。「プノン」は山。三聖山の一つという。車を降りると、その辺はもう人で混雑していた。そこから頂上を目指し一気に直登。すぐ前に行く若い女性の歩幅に合わせ、彼女が踏んだ跡に足を運ぶこと、一三分。ハァハァ息を弾ませて、ようやく辿り着いたというのが本音である。

頂上の物見台には、もうすでに様々な国の（といっても、日本・韓国人が大半）人が、それぞれに場所を確保して、夕陽が沈むのを待っている。デジカメが活躍する場である。



プノンバケンの夕日

私は、紙とペンを取り出した。十二月十三日。季は冬であるが、この国のどこにも冬の趣などない。山は青く、陽は燦々と、六月ごろの花が咲いていて、日も長く、どうも俳句になりそうにない。ようやく、汗だくの果てに駄句、

プノンバケン冬夕焼の此土浄土

「人も旅人 われも旅人―」あの青邨だったら、こういう処でどう詠むだろう。明後日は青邨忌である。

さて、足もとが暗くならないうちにと、われわれは象が人を乗せて登ってくる道を、すれ違いながら下った。途中、あちこちに大きな象の糞が落ちていた。そのすぐ近くで、少女が地べたにうずくまって、手を差し出していた。

象の糞地雷のごとし冬の蝶

*

朝五時、ホテルを発つ。舗装されていない暗い道をバスは六十キロ以上のスピードでかまわず走るから、最後の席の人は、衝撃で座席から二〇センチも跳ね上がった。

小一時間して、朝ぼらけの中にバンテアイ・スレイ（赤い砂岩）の遺跡に着いた。実は昨日、時間的に無理だといわれたのだが、一行のあまりの失望・落胆の態を見るに見



バンテアイ・スレイ遺跡
「東洋のモナリザ」

かねて、トムさんが施設管理御当局に出向いてくれた成果らしい。

朝食前に、券切りの掛り員が門前で待っていてくれた。お蔭さまで、「東洋のモナリザ」を十分堪能できた次第。

帰途のバスは、窓外に村々の朝の風景を見せてくれた。

どこか、かつて日本が経験してきた戦後の風景に似ていて、懐かしくさえ思われる。確かに、住いも、着ている服装も、ただその用をなしているだけで、物資も食材も情報も、今の日本に比べれば乏しいに違いない。ただ、彼らは自分達が貧しくて生きていけない、生れてこなければよかった、疲れた、と思っているだろうか。そうは見えない。この国には、自殺も、小麦粉アレルギーも、少ないに違いない。

ニートなんて言葉も知らないはず。食べていかなければ、ある意味で、これが人間の生きている自然体かもしれない。自転車ですぐに学校に急ぐ生徒たちには、生き生きしたものがあつた。そして、なんと校舎だけが立派に光って見えたことか。次代の若い人々に、村の将来を託しているのであろう。

「ボルボトの裁判、後始末にはとても多くの時間とお金



トンレサップ湖畔の生活

がかかります。いま、私の国はその力を教育と病院の方に
まわすことを選びました」と、トムさんが説明してくれた。
これは、「貧困」とはいわない。

一旦、ホテルに戻って朝食を済ませ、トンレサップ湖畔
に向かった。

船は、水上生活者の裏側を隠すところなく見せてくれた。
それは、生活の貧困というより、内戦の後遺症というか、
そのまま手がつけられずに放置されてきた現実である。

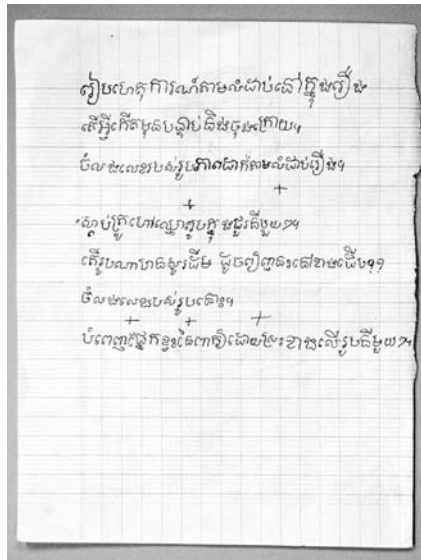
われわれは、停留している船上売店に乗り移った。別に
買い物などする気もなく、見ると、休憩イスの向こうで、
一人の少女がノートに絵を描いている。近づいて、眺めて
いると、なにか喋りながら私の方を見て、ノートに女の子
のリボンを描いた。また、私を見上げる。

「目を描いて」と手真似して言った。

次は？「足をこう」。次は？可愛い目で、こちらを促す
ように見る。

そこにトムさんも来た。

この少女は、ここの店主の娘で、この地区で何人もいな



小学校入学前の少女の絵とノート

い有産家の長女なそうだ。親は、跡取りの男の子が欲しかったと、この娘も去年まで頭を丸刈りにされていて、トムさんは男の子だとばかり思っていた、と言う。

立ち去るとき、少女は両手をノートから離して、持って行ってもいいヨ、という恰好をしてくれた。一ページだけ裂いて、裏を見るとカンボジア語が書いてある。私には読めないが、まだ小学校に入らないこの少女は字も書ける。きつと、いつか近いうちに、この子たちがこの国を立派に再建するだろう。

一枚の絵と文字が、そう期待させてくれた。

*

夕方、カンボジアを離れた。見送るために、いつまでも帰らずに手を振っていたトムさん。通訳デビューして間もないというが、「美德」「落ち着き」などと、彼の日本語は単なるガイド以上の域に達していて、なかなかである。近ごろ、日本国内でもあまり聞けなくなった雅語も話し、関西弁の軽みも真似してみせた。貧しくて「上の学校」には行けなかったというが、日本語を教えた人がよかったのだろう。そしてそれよりも、彼が「尊敬している」と言う



熱心に説明してくれるトムさん

「育ててくれた母」が、きつと素晴らしい女性なのだろう。
「危機的世界遺産」とともに、絵をくれた少女、自転車
をこいで学校に急ぐ中学生達の姿、そしてトムさんの話を
お土産にできた三日間であった。

タイ

飛行機がバンコクに近づくと、上空から見える首都近郊
は、それまでとは全く違って、土地区画整理も徹底して見
えた。

だが、市街を流れるチャオプラヤー川の、船から見た光
景は、二十何年か前に見た洋画（「橋」：題名は忘れたが）
そのまま、「汚れ」たイメージは拭い去れない。それに
引き換えて、と言ったら語弊があるが、ワット・プラケオ
（エメラルド寺院）、ワット・ポー（涅槃寺）など、ただ
ただ豪華絢爛^{げんらん}、われわれにはどうも食傷^{しよくじょう}ぎみになる。
宮殿やその他の観光スポットも見物したが、王朝の権威
と金や宝石の展示場でしかない。

なぜ、私がこうした印象をもってしまったのか。



タイ 暁寺（ワット・アルン本堂）

実は、先月、東京の仏教文化学会で「救い」をテーマにシンポジウムがあり、そこでタイにおけるエイズホスピス寺院のターミナル・ケア（看取り）の実情を聞いたからである（パネラー・戸松義晴氏）。

バンコクから一二〇キロも離れると、そこは日本の首都圏の外と違って、経済の格差、衛生環境の悪さ、まるで別の国だということ。その外社会では、エイズは普通の一般家庭の現実で、しかも問題は、多くの人は病院に行けないのが実態、とのことである。

バンコクの北一五〇キロにあるロブプリーの寺では、エイズ末期患者のために寺を開放し、四〇〇床、無料で看病の場を提供し、死に逝く人々を看取っている。

一年に、一〇〇〇人程の患者が死亡する。しかし、遺体を引き取りに来られるのは、その半分ほど、という。そういう話を聴いていたから、眼前の、黄金仏や寺院建築に施された無数の宝石も、そこに青や赤い石が在るとしか映らない。

寺院とは、救いとは何なのか。だれのための寺院なのか。あらためて考えさせられる。



エメラルド寺院

*

平泉文化を「黄金文化」と文字どおりに解釈し、すべて金箔で荘厳されている金色堂こそマルコ・ポーロの『東方見聞録』に書かれた「ジパング」の実証と、これを「世界遺産」登録のキャッチフレーズとしてアピールする、などと力説して憚らない関係者がいるようだが、少々軽薄に思われる。

金や宝石を言うなら、こちらバンコクにいくらでもある。「世界遺産」には、文化の普遍性が求められる。浄土を憧憬し欣求する空間、往生を約束され安心が得られる弥陀の光堂だからこそその金色堂である。決して、金箔で光輝いている金色堂だから価値があるのではない。

ゆめゆめ、観光の目玉とはき違えないことである。他を見て自らを省みる機会を得た小旅行でもあった。

（中尊寺仏教文化研究所長）

清衡公発願

紺紙金銀字交書一切経

— 『科研調査報告書』を読む —

菅原光聰

このほど、京都国立博物館を中心とする『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』（科学研究費補助金研究）の報告書が刊行された。これは昭和六十三年度より継続的に行われてきた、金剛峯寺、観心寺、中尊寺に伝存する「紺紙金銀字交書一切経」調査の最終報告ともいえるものである。中尊寺由来の宝物調査として興味深く読ませてもらった。

「中尊寺経」と総称される経典群は、奥州藤原氏初代清衡公の発願になる「紺紙金銀字交書一切経」、二代基衡公発願の「紺紙金字法華経」、三代秀衡公発願の「紺紙金字一切経」とその他の願経に分類される。このうち金銀字経

は紺紙に金字と銀字、一行ごとに書写し、巻頭には平安期の絵画資料としても貴重な「見返絵」と表紙絵を配している。当初は五千三百巻ほどあったと考えられている。



紺紙金銀字交書一切経（過去莊嚴劫千佛名経 巻上）

後世中尊寺から持ち出されて、現在高野山金剛峯寺や大阪観心寺等にその多くが所蔵され、中尊寺には近年還蔵になったものを含めて二十六巻所蔵されている。今回の調査の結果で最も興味を惹かれたのは、紺の料紙を赤外線カメラで撮影した結

果、多数の墨書や墨印が発見されたことである。意外なところにも歴史を紐解く情報が隠されていることに驚かされた。金銀字経の写経に用いられる紺紙は、楮紙を藍で濃紺色に染色しているため、反古紙を利用することが可能である。紺色に染められた紙の中に、田地争論に関する文書や仮名消息、今様と思われる墨書が潜んでいたのだという。また紙端の部分に、紙の製造・調達に深く関与した人物のものと思われる花押や墨印が記されているものもあったという。こうした発見が、料紙の調達や作成について知る手がかりになるということである。

また、作風から判断して、見返絵は一人の絵師が十巻を単位として担当したという。経文書写の方法は、金字行と銀字行を交互に書いていったのではなく、まず金銀どちらかの行を書き終えてから他方の行を書いていったという。これは、一行おきに銀字行だけ記されて未完の状態で伝わっている経巻の存在や、金字行と銀字行の筆跡の違いなどから、そのように判断されるとのことである。写経生の共同作業の場である写経所の作業体制のあり方などをも想像させる調査結果であった。

ところで、この金銀字一切経の書写は、何をモチーフとして発願されたのだろうか。よく引き合いに出されるのが、慈覚大師円仁の記した『入唐求法巡礼行記』の記述である。それによると、中国五台山は文殊菩薩の聖地清涼山の金色世界に見立てられていた。この五台山の金閣寺には金閣、経藏閣という堂宇があった。金閣は三層の建物で、第一層には騎師文殊菩薩像と人の手の皮に書いた仏画、辟支仏の歯、仏舍利が納められ、第二層には金剛界諸仏像、第三層には一字金輪仏頂尊を中心とする五仏頂尊像が安置されていた。そして経藏閣には紺碧紙に書かれた六百余巻の金銀字一切経が納められていたという。金銀交書の一切経は日本では中尊寺のほか例がなく、この中国五台山の記述があるのみである。また金色堂や、金剛界・胎藏界諸仏像を安置したという両界堂などの中尊寺伽藍、中尊寺の一字金輪仏頂尊像なども、この慈覚大師の著述から発想を得ているようにすら思えてくる。慈覚大師は第三世天台座主で、入唐して密教や五台山念仏を学び、帰朝後は「法華経」「密教」「浄土教」を体系化して天台教学の基礎を築いたことで著名である。そして中尊寺もまた慈覚大師を開山に

仰いでいる。実際、『吾妻鏡』に記された藤原清衡公草創の中尊寺伽藍をみると、「法華経」の多宝寺・釈迦堂、「密教」の両界堂、「浄土教」の金色堂・二階大堂といったように、慈覚大師によって体系づけられた天台教学の影響を見て取ることが出来る。また、経蔵の螺鈿八角須弥壇の意匠をみても、華籠に盛られる蓮華の花弁は「法華経」を、金剛鈴は「密教」を、迦陵頻伽は「浄土教」を表していると思われる、まさに慈覚大師の天台教学を象徴するデザインである。さらに、その上に安置された縁の深い五台山の様式を汲むもの



騎師文殊五尊像



螺鈿八角須弥壇

である。この五台山文殊は国内で最も早い作例に属するという。

先述の赤外線撮影の調査では、墨書の内容から延暦寺の僧によって貢納されたと思われる金銀字一切経の料紙の存在が明らかになったという。また、中尊寺の金銀字一切経に先行する金銀交書経に延暦寺の金銀字法華経がある。こういったことから金銀字一切経は、清衡公の「金銀和光して弟子の中誠を照らさん」との願いのもと、慈覚大師の教学を汲む延暦寺の人脈の中で発想されたと思われる。そして都の模倣に終わらぬ奥州藤原氏の新取の気風が比叡山の天台教学を通じて五台山へとつながり、金銀字一切経や文殊五尊像、彫像として珍しい一字金輪仏頂尊像という形で結実していったのではないだろうか。

最後に、折しも昨年末には市井に伝存していた金銀字経一巻が中尊寺に還蔵された。清衡公の文化精神の一滴が再び平泉の地に還ったことは大変喜ばしいことである。

(管財部次長)

〔福聚教会・中尊寺支部便り〕

全国大会参加ツアーを振り返り

佐々木典子

天台宗開宗千二百年慶讃・叡山流全国大会が、去る十月十三日に大津で行われ、陸奥本部では中尊寺、毛越寺、興福寺の支部が参加しました。

大会では、各地方本部が七組のブロックに分けられ、それぞれに唱詠と詠舞が発表されました。詠舞は、一組六十名が美しく揃って舞台いっぱいに舞い、とても見事でした。次に、お座主猥下をお迎えしての、法楽やご挨拶をはじめとする式典がとり行われ、猥下のお元氣なお姿を嬉しく拝見しました。

続いて講師による新しい曲や舞も披露され、さすがに素晴らしい舞台に惹きつけられました。

新しい曲は山本文晴氏の作曲になり、富士子夫人も会場に来られ、花を添えておられました。



大変な盛り上がりでした。

翌日、比叡山にのぼり、根本中堂、大講堂でご詠歌を唱えさせていただきました。また、伝教大師のご廟所びょうじょの浄土院も参拝させていただきました。ここには十二年籠山の僧が厳しい行を修しておられると聞き、身の引き締まる思いがしま

特別企画として、

大スクリーンに映し出された記念DVDは、杉木立の中の延暦寺をはじめ、美しい写真ばかりで、和讃や詠歌の挿入曲も調和して、力作でありました。

ゲストコーナーに、大月みや子さんおほつきみやこの歌とトークがあり、スピーカーのボリュームも十分に、

した。

今回は、大会参加のほかに平等院も参拝しました。

ご本尊の阿弥陀像は、ちょうど修復から戻られたばかりとのことで幸いでしたが、光背や蓮台はなく、雲中供養菩薩は、ほとんどが宝物館に移されており、堂内は以前の面影がなく寂しいものでした。保存のためにはやむを得ないのででしょうか。

次に訪れた琵琶湖畔の佐川美術館では、「人間国宝・絵里佐代子・きりかね截金の世界」の展覧会が開かれており、細緻な美しさに感動。また、比叡山の山並みを、琵琶湖を挟んだ対岸から眺めたり、これまでに見たことのない湖岸の風光も楽しむことができました。

帰路は、会員の希望で新しくできたセントレア（中部国際空港）から。無事に二泊三日の旅を終えました。

今年は、秋に東日本大会が予定されています。

季節も春となり、また気持ちを新たに、会員の皆様と楽しく活動が続けてまいりたいと思っております。

（円乗院寺婦・福聚教会中尊寺支部幹事）



天台宗開宗1200年慶讃大法要叡山流御詠歌全国大会

「タイ王宮」 迷想私抄

高橋 はるみ

タイ王宮（ホイマーンメーク宮殿）は、一八九四年農民から買い受け、一九〇一年より移り住んだ国王ラーマ五世の宮殿。ここは四方を川に囲まれ、国王を守る自然の要塞とでも云うべき全て考え尽くされた場所にあった。そして現在も、カメラやバッグの持ち込みは禁止され、そこかしこに見張りが立ち、厳重な監視下におかれている。広さは六二ライ。全く見当がつかない。（一ライは四八〇坪なので二九七六〇坪もあるようだ。）

この少しピリピリした空気の中、きれいに一寸の狂いも無く、そしてチリ一つ無く整えられた庭園に一歩足を踏み入れた。遠く離れた異国の地、日本からはるばるやって来た中尊寺研修旅行団を、涼しい川風と共に木々にさえざる小鳥たちの声が迎えてくれた。

さていよいよ宮殿に入った。宮殿の広さは四九〇〇坪。

三階建てである。この中の一角に模型が展示されていた。宮殿を忠実に再現したそれは、約一五ヶ月かかって造られたそうだ。

宮殿のスケールは想像の域を遙かに越えていた。床は全てチーク材。ピカピカに磨かれ赤茶色に光っている。一〇〇年前の建物とは思えないモダンで何処か真新しさを感じる。さすが、世界で一番大きな黄金チーク材の宮殿、別名「雲の上の宮殿」である。

ここもやはり監視は厳しい。見張りが立つのは当然のこと、極め付きは、最近できたクレーターの穴。この穴のカバーを踏もうものなら罰金が課せられる。その金額たるや……。ガイドのスーさんの説明を聞こうと身を乗り出した瞬間、同行の阿部和恵さんの目がキラリと光った。なんと、その穴わずか数ミリの所に私の足があったのだ。『危ない！』思わず身がすくみ、説明など耳に入らなかった。

各部屋には、世界の国々から贈られた贈り物が所狭しと飾られている。水牛の角、鹿の角、タイプライター、象の足、ワニの骨格、九谷焼、タイのワニ皮を張ったイタリア製のイス、清の時代の焼き物。鉄砲、そして刀。戦争で人

を殺めた刀は霊が悪さをしない様に下向きに霊を封じ込め、人を殺していない刀は上向きに飾られている。そしてそこには、国王をお護りする軍隊専用の階段があった。何処からどこまで通じているのか、解からない。それこそ迷宮入りである。

それから、謁見の間。当時、国王は神様のような存在。雲の上に住んでいる人だった。ここに立った人々はどんな気持ちで王をお待ちしていたのだろう。一般の人々が直接王にお逢いできるはずもなく、巨大な大鏡を通してのご対面であったという。その鏡の大きさときたら物凄い。幅五メートル、縦九メートルはあるだろうか。それでなくても高い天井の造りの建物。一階床部分から二階天井部分までの一枚のカガミである。それも外国製。その迫力ときたら、息を吞まずにはいられない。今でさえこの鏡の前で身だしなみを整えるなど恐れ多くてできそうに無い。ましてや「ワタシキレイ？」なんて鏡の精に尋ねてもしようものなら、「オロカモノ〜」と鏡の中に引きずり込まれそうだな。想像しただけでも恐ろしい。

国王の居住空間である三階。天に一番近い場所である。

全てがヨーロッパスタイル。贅沢の極みである。トイレルーム、シャワールーム、ベッド、車椅子。画的である。そして、おそらくシルクで出来ているであろう絨毯。肌触りを確かめてみたい葛藤に駆られる。監視の目が怖い。

そんな中、唯一タイ王国らしい仏間。一つの部屋全体が神聖なる祈りの場である。エメラルド寺院の縮小版とでも云ったらイメージが湧くだろうか。ほかの場所とはまるで空気が違っている。雑踏のざわめきさえかき消され、静寂という音が聞こえる。

国王は大変信心深く、事有るごとに手を合わせていたと云う。王はここで何を祈っていたのだろうか。

何時の世も、国を問わずも、仏と先祖に祈りを捧げる事に違いは無い様に想え、そっと手を合わせ、今日ここに来る事が出来たお礼と、世界平和を祈らずにはいられなかった。

昨日、訪れたカンボジアの悲しい戦争。国を護ろうと人を殺めてしまった刀。澄み切った青空を見上げる旅行団の胸にポツリ、ポツリ、涙の雨が降り注いだ。

(中尊寺職員)

中尊寺研修旅行第2班 平成17年12月11日～16日 タイ・カンボジア方面 旅程表

3	2			1	日次	
12 /	12 /			12 /	月日	
13	10 .. 55			06 .. 30	23 .. 10	時間
08 06 30 00	20 20 50 30	19 18 15 30 40 55			15 .. 00	現地時間
シエム・リアップ	シエム・リアップ	シエム・リアップ	バンコク	成田	中之坊下	地名
マイクロボス	バス	PG944便	JAL717便	バス	バス	交通機関
<p>一行16名。JTB東北小森あき子氏添乗（最優秀添乗員賞受賞者） 東日本観光バス 昼食（鶴巣SA） 成田インターナショナルH泊。</p> <p>ホテルより空港へ。早苗さん合流 出国手続き後空港内にて各自朝食 両替する（1ドル↓約130円） タイバンコクへ。機内食 座席は満席 バンコク空港到着。乗り継ぎがあり夕食を各自取る。 空港よりバンコク航空（プロペラ機）にて。空席あり68人乗り カンボジア シエム・リアップ空港到着。入国手続き 目玉親父カメラ 両替す（円↓ドル↓リエル 0・4円約1リエル） 現地ガイド トム君合流。シテイアンコールホテルへ。 シテイアンコールホテル到着 各自部屋ではお湯の使用一度に 300リットルが限度の由。</p> <p>ホテルにて朝食。バイキング 1日20ドル券 アンコール・トム（バイヨン寺院）観光 好天 あまり暑くない。（アンコールⅡ大きな トムⅡ都 ジャヤ バルマン7世建） タ・プルーム（がじゅまる樹に覆われた仏教寺院）</p>						
						行程

			4				
			12 / 14				
08 08 50 20	06 25	05 04 00 00	20 18 30 30	16 30	14 30	12 00	
							シエム・リアップ
			マイクロバス				
							<p>昼食(サマピアップ) クメール料理(青菜人気あり、ココナツミルクが基本)</p> <p>(カボチャプリン?) アンコールビール 昼食後ホテルにて休憩</p> <p>アンコール・ワットへ(アンコールⅡ大きな ワットⅡ寺院 スールヤヴァルマン2世建)</p> <p>夕陽見学プノンバケン(ヤシヨバルマン1世) 急な上り坂(石)</p> <p>最後急な階段、帰りは象さんの登る緩い坂を下りる。明るいうちに!</p> <p>カンボジア舞踊(クーレンⅡレストランにて)を見ながら夕食バイキング。</p> <p>牛の串焼きがベスト。</p> <p>ホテルにて小森さんより明朝バンテアイ・スレイ見学の希望を問われ、全員が参加を希望する。(ビックリ!)</p> <p>モーニングコール(小森氏)あり。</p> <p>ホテル出発。バンテアイ・スレイ行(他の団体もアンコール・ワットに向け出発。この時間が混まないで見学できるとのこと)</p> <p>真っ暗な中をバスは進む。途中バウンド頻り。</p> <p>バンテアイ・スレイ見学。東洋のモナリザと称される壁画が12体現存。最も美しい彫像には接近できず残念。他の団体がまったくいない。</p> <p>素晴らしい彫刻(他の遺跡よりも彫りが深く赤い砂岩)</p> <p>帰途、現地庶民の生活がみれる。</p> <p>ホテルに戻り朝食 バイキング</p> <p>トンレサップ湖見学。船乗り場まで混雑の中歩く。かなり臭いがきつい。</p>

5								
12 / 15								
08 06 30 30	20 .. 40	18 18 16 40 00 20	15 .. 00	13 .. 55	13 .. 10	12 12 30 00		
				バンコク		シエム・リアップ		
大型バス船		大型バス	大型バス		P G 9 3 3 4 便	マイクロバス		
朝食 バイキング 出発 船乗り場へ(トイレ有料5パーツ) 船で暁寺(ワット・アルン) 三島由紀夫が命名? タイ独特の陶器で建物に種々な模様を張り付けている。それが朝日に当たりきれいに輝いて見えることより命名された(小森談)。	朝食 バイキング 出発 船乗り場へ(トイレ有料5パーツ) 船で暁寺(ワット・アルン) 三島由紀夫が命名? タイ独特の陶器で建物に種々な模様を張り付けている。それが朝日に当たりきれいに輝いて見えることより命名された(小森談)。	乗員(女性)で大いに盛り上がる。(職場の及川さんに瓜二つ)ホテル戻り	飲物はJTB持ち(???)他の団体に引率のJTB関西の添乗員(女性)で大いに盛り上がる。(職場の及川さんに瓜二つ)ホテル戻り	事長挨拶	入国審査等 両替(1パーツ約3.2円) バンコクのガイド現れず。 小森さん大奮闘 空港でコーヒー飲む(小森さんおごり) ガイド到着(スー・ラ・チャイさん 日本に2年半留学 奥さんは日本人) ちょっと聞き取りにくい。道路は非常に混雑。 ホテル(フォーチュンH)到着。 レストラン(タイ式水炊き料理店 コカ)へ。 レストラン到着 JTBバンコク支店マネージャー来た。執事長挨拶	飛行機にてバンコクへ。 される。(感謝!!)	船は、お兄さんが運転、小学生くらいの弟が棹で協力。船上生活者の様子がみれる。キリスト教会・病院・学校も船。途中鳥をさばいている人もいた。揚げ海老(美味しい) 昼食 弁当(おにぎり2ヶ) 肉団子他バスの中で(むせる) 空港到着 トム君とお別れ 出国審査までずっと見送られる。トム君からヤシ葉で造った箱の中に銀製の薬入れがプレゼントされる。(感謝!!)	

	6	
	12 / 16	
	14 12 07 06 30 20 30 00	
		23 22 21 20 19 13 12 10 05 30 50 15 30 20 30 00
	国見インター	
	東日本バス	船 レストラン 大型バス 大型バス 大型バス JAL704便
	成田到着。気温マイナス5度。入国審査 早苗さんは成田空港にて別行動。 中尊寺へ向け出発。道路は空いている。 昼食 レストランにて 松本さん・阿部和恵さん一関インターにて。荻山さんスーパー センターにて降車。第1駐車場着。おつかれさん!! フーツ!! 〈仁秀記/第1校正 みきこ/最終校正 はるみ〉	沙羅樹の花、菩提樹の実、タケ子さんに会う。 スーさんからマンゴステイン・ランプータンを貰い食べる。 王宮博物館、エメラルド寺院（本尊Ⅱ玉）非常にカラフル 王宮見学 買い物（宝石類） 昼食（キュラスカリア） タイ料理（ココナツミルクをふんだ んに使用）さしみ 涅槃寺（オース・ワット） バンコク博物館見学（写真撮影禁 止）ラーマ5世関係 買い物（タイシルク） 買い物（免税店・伊勢丹デパート） バンコク空港へ 空港到着 スーさんとお別れ。 出国審査後買い物食事それぞれに。 出国ゲート前集合 20分くらい遅れる旨放送あり。 搭乗 離陸 追い風強いため5時間位で到着予定との機長説明。 軽食

〔グラフィア解説〕

還蔵された金銀字経

昨年十二月二十五日に、紺紙金銀字交書一切経のうち「不空羼索神變真言経卷第二十八」一巻が中尊寺に還ってきた。平成十四年発行の〈寺報〉関山第八号に「近年還蔵された金字経・金銀字経について」が掲載され、翌十五年の九号に「植村和堂氏奉納の金銀字経」が掲載されている。これらに倣って、今回もデータを左記のように掲げることとした。尚、見返絵及び巻頭部分のカラー写真については〔寺報ぐらびあ〕の頁に掲げ参考に供することとした。

経典名 不空羼索神變真言経

尾題 不空羼索神變真言経卷第廿八

見返絵 樹下説法図（六菩薩・八護法善神・宝樹・

飛行楽器・散華）

入蔵年月 平成十七年十二月

文字色 金銀交書

本紙縦 二六・二〇

全長 九四五・〇〇

見返横 二一・七五

紙数 一八

界高 一九・五〇

界幅 一・八五

大蔵経No. 一〇九二

注1

経典名は、便宜、大正新修大蔵経の経題とした。

注2

「中尊寺金銀字経に関する研究」報告書（研究代表者・京都国立博物館長藤澤令夫）に準じ、本紙縦・全長・見返横・界高・界幅の単位はセンチメートルとし、見返絵の「比丘」は光背のある比丘形、「僧形」は光背のない比丘形とした。紙数は見返しを除く本文（制作当初分）のみの紙数を示す。

注3

大蔵経No.の数字は大正新修大蔵経の番号である。

（中尊寺仏教文化研究所主査 北嶺澄昭）

(岩手日報「ばん茶せん茶」より 平成17年10月7日)

国道4号を平泉町から衣川村へとつなぐ衣川橋の手前に、中尊寺裏参道、北坂の上り口がある。道路端に祭られた地藏尊が目印だ。

地藏尊の横から始まる坂道は、傾斜が少しきついのが、本堂のすぐ脇に出られるようになっていいる。観光客でにぎわう表参道の月見坂よりも「奥の細道」の風情があつて、こけむしたたずまいが気に入っている。

今年の夏は、ここを通過して中尊寺施餓鬼会法楽の「義経の笛」を聴きに行った。予定が立たず見学しそびれていた県立博物館の「義経展」。そこに出品されている笛が、そちらの方から平泉に向いてくれるというのだから、これは千載一遇のチャンスであった。

施餓鬼会の行われている本堂には、一般の参拝客や私のような笛だけが目当ての者も快く招き入れられた。席をすすめられて檀家の人たちと一緒に演奏の時を待った。

読経の声がやむと、哀愁を帯びた調べはかたずをのみ耳をすませていた私たちの背後から聞こえてきた。金紗の衣をまとった奏者は演奏しながら回廊をぐるりと回り、ゆっくりと内陣の前に歩み出る。たおやかな女性奏者には五条大橋の少年牛若丸を思わせる面影があつた。

「薄墨」と銘のある竜笛はなかなか味わい深いものだ。義経がいとしい者たちのために奏でたであろう音色が、ゆかりのある中尊寺本堂を渡る風に乗って、うちふる

えている。「哀切嫋嫋限りなし」と、千田貫首さまはおっしゃった。まさに同感である。

気分はすっかり平安のお姫様になって、帰りは金色堂と讚衡蔵の間の道を下った。中尊寺ハスを見ていこうと思ったからだ。盛りはとうに過ぎていたが、薄紅に二つ、三つ咲き遅れた花びらが美しい。時季を逃した訪問者を待っていてくれたかのように、池の中でけなげに立っている。

おそらく世間には、この笛やハスよりも音色、花色の秀でたものがたくさんあるに違いない。けれども義経が愛用していたという伝説の笛、泰衡の首級に手向けられたハスの種から発芽した花だということが私たちの心に響き、感

動を呼び起こす。

平安の人々がめでたものを、平成の私も共に味わったせみ時雨の中尊寺。悠久の時間をさかのぼり、あの時代の人々と隣り合わせた気配は錯覚だろうか。つかの間の夢が私の中を駆け巡った。

「岩手日報社」提供



(実習日誌から)

8月27日(土)

○貫首の説法を聞く

初端しよたんから説法を聞くことになるとは思っていなかった。開講式の後はずぐにへかんざん亭へ戻り、中尊寺の概略について学ぶのだと予想していたのだ。けれど、中尊寺が開かれた場として地域の住民、観光客に対して、どのようなことを行なっているのかを実際に見ることができるのは良い機会だと思う。もちろん、大僧正のお話を聞けることも。(大僧正は「今日は二区の方たちがいらしていますね」とすぐにおっしゃっていました)が、それは顔を覚えることができる程、地域の方たちが足繁く中尊寺に通っているという心でしようか? 今日のお話は心

についてだった。私は、心もそうだが、物事は立体であると考えている。一つの視点からだけでは全体を見渡すことができず、必ず死角ができてしまう。見ることで

たいがために映画館へ行っていた時期があると思うと、少し新鮮な気がした。

きない裏側は、見ている人にとって無いも同じ。無意識の領域はこれにあてはまると考える。大僧正は心は悪とおっしゃっていた。それがどういうことか俄には分からないが、もし、罪深いあるいはおろかなという意味だったら理解できるとは思っている。常に自問は裏切りのような形で返ってくるが、それをそのまま受け入れるのが良いと私は思っている。

「御遺体学術調査」の内容には

もっと驚かされた。過去に開けたことがあるのを知っていても、棺を開ける瞬間はドキドキしてしまう。禁忌に触れるのではないかと頭の片隅で思ってしまう。御遺体をあんなにはっきりとカメラで映しているのも、文化財としての扱いは構わないが、信仰の対象としては少し抵抗がある。今回は学術調査なので比較してはいけな

○中尊寺の記録映画について

ニュース映画なるものがあるのを初めて知った。ニュースを知り

査の内容では、指をふやかして指紋をとるといのが気になった。

そんなことして何のためになるの
だろうと思ったが、とれるデータ
はすべてとるのが調査の基本なの
かもしれない。映像では棺内のゴ
ミをふるいにかけて、植物の種をと
り出している場面があった。伝忠
衡（実は泰衡）の棺から見つかつ
たハスの種が花を咲かせたという
話を、以前佐々木先生が講義でお
っしゃっていたのを思い出した。

次に「よみがえる金色堂」につ
いてだが、これを見ると文化財の
修復がどれ程緻密で根気のいる作
業であるかということが、実際に
現場に入ったことはなくとも少し
は分かる気がする。あの気が遠く
なる工程を一つ一つクリアして、
完成させたのはすごいことだと思
う。もちろんそれを作り出した創

建当時の人々の技術も素晴らし
い。また一方で、文化財修復は試
行錯誤の繰り返しだということも
分かった。修復したからといって、
それが完璧だという保障はない。
今日は良しとされていた方法が、
明日は悪いとなっていることもあ
りえる。その度に文化財が危機に
さらされるのも考えものだが、そ
ういった修復の現場で、技術が着
実に向上するのを願っている。

8月28日(日)

○実見

今日は色々なところを見たた
め、全てを語るには長くなりすぎ
る。そこで、特に興味を引いた幾
つかを挙げて書こうと思う。

まずはなにより金色堂につい

て。国宝第一号であり、平安工芸
の至宝精華と称される金色堂。近
世「日光を見ずして結構と語るな
かれ」といわれたが、それ以前は
「金色堂を見ずして結構と語るな
かれ」といったかも知れない。

「結構」と言うだけでは失礼にあ
たる気がする程、金色堂は圧倒的
な光を放っていた。荘厳、華麗な
たたずまい、繊細にして大胆な作
り。一言で失礼ならば幾つも言葉
を並べれば、それでいいのかわい
いと、そうでもない。言葉が無力
になる時もあるのだ。私が特に好
きなのは、蒔柱だ。夜光貝のオパ
ールのような偏光は元々好きだっ
たが、それが、さらに細かい彫刻を
施され、磨かれ、金・漆との見事
な調和をはかっている。貝の産地

は沖縄、東南アジアだという。遠くから運ばれた貝が日本の技術で素晴らしい荘厳具に仕上がったのは感慨深い。

松尾芭蕉の『おくのほそ道』で「三代の榮耀一睡の中にして」と始まる章は、中学時代に習ったことがある。けれど、教科書では「夏草や兵どもが夢の跡」で終わっていた。その後の「五月雨の降り残してや光堂」というのは記載されていなかった。しかし、佐々木先生がこの二句は「対」であるとおっしゃっていたように、やはりこれは双方ともに味わないと意味を成さないと思う。現地を訪れたことで、なお強くそう思った。

讃衡蔵では、秘仏一字金輪仏頂尊像は機会があれば是非拝見した

いと思う。平山郁夫が描いた絵を見てなおそう思った。平山郁夫は淡白な画面なのに厚みがないわけでもなく、日本の気候に合ったようなその独特な雰囲気が好き。

一目見てすぐに気に入ったのは平塵案である。あの凜とした姿はなかなか良い。同じ寸法で作っても、オリジナルに近づけないというのにもかにも納得ができる。

毛越寺について触れておこう。ここの庭園は最初見た時こそ味気ないなと思ったのだが、しばらく池の周りを歩いてみると、感じ方が異なってきた。今回は夏だが、あやめの咲く時期や紅葉の頃、墨絵のような白黒世界になる冬にも訪れてみたいと思った。

8月29日(月)
○実習

午前中は讃衡蔵の収蔵庫に入った。分厚い扉を押し開けると、前室があり、さらにその奥の第一収蔵庫へ向かった。時折テレビで見かける海外の博物館の収蔵庫はスチールの棚に梱包された品が並べられてあり、とても無機質で冷たい印象があったが、この収蔵室は内装が全面木でできており、暖かい感じがした。収蔵庫ではまず最初に中尊寺経を見た。次に収納箱の紐を実際に結ぶ練習をした。結び目が団子状になってしまったので、折り目がきれいに平らになるよう心がけた。

場所を移動して、今度は巻子の実習をした。

昼食後は能楽堂の掃除を行なった。竹箒で舞台の周辺を掃いたのだが、不慣れなため少々手こずった。それが終わると草むしりをしていたチームに加わり、一緒に作業した。全ての掃除が終わると、北嶺先生が「舞台に上りたい人はいますか」と訊いて下さったので、お言葉に甘えて上ってみることにした。白足袋を履き、一礼して舞台に上ると、背すじがしゃんとするような心もちになった。

その後、讀衡藏に戻り、卷子の実習の続きを行なった。北嶺先生はまずモノを見ることが大切だとおっしゃった。紐の状態や結び方・軸の状態、それらを確認してから作業に入るのだ。私が扱った

のは平安時代のもので紐はなく、軸端（はね）がふくらんでいる形状のものだった。こういった軸の場合、巻

きとる際は机の角を使用して平行に巻くと教わったのだが、今回は時間の関係上最後まで開かなかつたので、実践できなかった。途中までにもかかわらず、何回やってもたけのこ状になってしまい、作業は難航した。座ってやっているせいかもしれないと思い、北嶺先生に「立って作業しても良いですか」とうかがった。すると、「実際の調査は何時間もかけて行なうから座ってやっている」とのこと。ならば座っていても出来るようにしなければと最後まで座って作業したのだが、出来は散々だった。

最後に掛軸を扱った。動作（特

に前のめりにならないよう）に気をつけたい。

実習のまとめ

5泊6日という長いように思えた実習期間も、過ぎてみればあっという間だった。実物を扱う実習は大いに緊張したが、日頃の机上で行なう授業ではありえない、貴重な体験をさせていただいた。

初めて見る金色堂は想像以上に立派で、圧倒されてしまった。当時の職人の技術の高さや復元修理を行なった人々の努力が実感された。特に極楽の草花を模した螺鈿（らでん）の細工は見事で、思わず見入ってしまった。精巧な細工に、周囲一面のきらびやかな黄金。繊細さと大胆さが合わさった珠玉の一品だ。

毛越寺の庭園では、一年に二十日間くらいしか見ることができないという、実際に水が流れている遣水やりみずを見ることができた。ここで曲水の宴が行なわれていたのかと思うと感慨深い。想像よりも川の長さが短く、流れも速かったので、ここを小舟が通過するまでに歌を詠むのは大変だろうと、つい考えてしまった。きっと昔の人は機知に富んでいたのだろう。

讚衡藏で紺紙金銀交書一切経を見たのも印象深かった。実際見るにあたってはすごく緊張したが、銀字が今もきれいに残っているのには感動した。紺の地に金銀は映える。ただ文字を読む資料ではなく、これは芸術品だ。また、収蔵庫へ入るのも初めての経験だっ

た。展示ケースでの保存については授業で習ったことがあるが、肝心の収蔵庫での管理は習ったことがなかった。収蔵品の数も展示ケースの中より収蔵庫に入っている方が多いにもかかわらず、である。このような背景を知らないようでは、博物館に勤められないだろう。百聞は一見にしかず。学芸員になるための貴重な体験をさせてもらった。

能楽堂では実際に舞台上上ってみた。高さはあまりないはずなのに、視界がひらけたような気がする。一步一步踏み出すごとに、心が引き締まる。舞台上立つ演者もこんな気持ちになるのだろうかと思いをめぐらせた。

卷子と掛軸の取り扱いを思うよ

うにいかず、自分の勉強不足と経験不足を知らされた。しかし、今回の実習は確実に力になっているだろう。後は継続することである。拓本の実習にも同じことが言える。きれいで正確な動きを身につけられれば、瞬時に対応できるだろう。

無量光院跡では発掘をさせてもらった。私は運良く陶器の欠片を見つけることができたが、それはもちろん私一人の手柄ではない。発掘に携わった全ての人の成果だ。見つけた陶器は後に測定され、資料として残ることになるだろう。そう考えると少し嬉しい。

衣川沿いに連なる遺跡は、堤防を建設するための調査の過程で見されたものだ。詳細はまだ不明

だが、かなり大規模な遺跡のよう
だ。詳細が分からないからこそ、
未知数の遺跡とも言える。調査を
終えたら、ここは堤防になってし
まうのだろうか。いくら調査をし
ても、その場所を埋められてしま
ったらそこは息の根を止められた
遺跡になってしまうだろう。言わ
ば、死んだ文化財だ。

中世社会の荘園の面影が残る、
骨寺村荘園遺跡にも行った。絵図
と実際の風景を照らし合わせ、そ
れが一致する度に一行の間に感嘆
の息がもれた。私はというと、皆
の感動についていけず、ただボー
ッと景色を見ていた。この景色を
定点観測し続けていたら、数年前
も、数十年前も、数百年前も、季
節の移り変わりこそあれ、ほぼ同

じ姿で映っているのだろう。そう
考えると少し怖いような気もす
る。人間が作りあげた風景が、長
い間その姿を残しているなんて奇
跡に近い。それはもちろん物にも
いえる。

物はいつか朽ち果てる運命なの
だから。それをできるだけ留め、
後世に伝えていくのが人の――とり
わけ学芸員の――仕事なのだ。モノ
を保存し、公開し、後世に残す。
学芸員の基本的な仕事は既に習っ
てきた。しかし、その仕事の重大
さ、重い責任は今回の実習で初め
て身にしてみた。生きた文化財をい
かに生かして（さらに言えば活か
して）いくか。難しい問題だが、
やりがいのある課題である。今、
この課題に取り組んでいる人に敬

意を表し、また自分もその活動に
一端でもいいからかわりたいと
思う。今回の実習で学んだこと、
感じたことを忘れずに、これから
も研修を続けていきたい。



無量光院跡で発掘体験も

大正大学博物館実習（日程）

		8月27日	8月28日	8月29日
月日	時限	項目	内容	担当
	第5限	法話 開講式	本堂にて法楽。その後オリエンテーション 中尊寺貫首の土日説法拝聴	本堂 本堂
	第5限	事前学習	中尊寺を理解するため、中尊寺御遺体学術調査・同金色堂解体修理に関する記録映画を鑑賞	佐々木邦世 北嶺澄照
	第1限 第2限	中尊寺見学	金色堂・経蔵・覆堂・能舞台・讃衡蔵などの歴史文化財の講義	佐々木邦世 中尊寺境内
	第3限 第4限 第5限	史跡見学	毛越寺・観自在王院跡・無量光院跡・柳之御所資料館・平泉郷土館の見学	佐々木邦世 平泉町内
	第6限	文献資料調査実習1	中尊寺文書に関する基礎知識を学ぶ	小此木輝之 大沢温泉旅館
	第1限 第2限	文化財取扱の基礎	中尊寺経ほかの文化財を例にとりながら学習する	北嶺澄照 讃衡蔵
	第3限 第4限 第5限	文化財保存管理実習	金色堂・能舞台・讃衡蔵についての文化財保存管理を実際に体験（能舞台については体験の一環として清掃を行う）	北嶺澄照 中尊寺境内
	第6限	文献資料調査実習2	中尊寺文書の解説等	小此木輝之 大沢温泉旅館

8月30日	第1限	拓本実習1	室内で拓本の練習	小此木輝之 北嶺澄照	讀衡蔵
	第2限	拓本実習2	境内で石造物の拓本を採る。	小此木輝之 北嶺澄照	中尊寺境内
	第3限	考古遺跡見学	特別史跡無量光院跡での発掘見学及び実習、平泉町文化財センター及川司氏の協力をいただく。	北嶺澄照	平泉町内
	第6限	文献資料調査実習3	中尊寺文書の解読等	小此木輝之	大沢温泉旅館
8月31日	第1限	古文書調査実習 遺跡踏査	中尊寺文書を読み、骨寺絵図に描かれている一関市本寺へ行き、現地を歩く。 現在注目されている衣川遺跡群の接待館遺跡を見学。平泉町世界遺産推進室斎藤邦雄氏の協力をいただく。	佐々木邦世 小此木輝之 北嶺澄照	讀衡蔵 一関市本寺 衣川村
9月1日	第1限	レポート作成	今回の実習に関する理解を確認	小此木輝之	かんさん亭
	閉講式				本堂

〔大正大学 オープン・カレッジ〕

9月3日

早朝 毛越寺庭園回遊

9…00～9…40 讀衡蔵 見学

9…45～10…20 本堂「泰衡公御月忌」随喜

(金色堂まで練行の後につく)

10…30～ (金色堂法楽) 拜観

昼食

12…00～13…40 野外能舞台にて仕舞と幸若舞鑑賞

14…00～15…00 本堂にて貫首の「土日説法」を聴聞。

研究／出版

平成十七年一月～平成十七年十二月

〔出版〕

『東北中世史の研究』上巻

入間田宣夫編

高志書院

（関連するもののみここに掲げた）

「鎮守府付属寺院の成立」

菅野成寛

「奥州平泉と京」

丸山 仁

「平泉藤原氏と陸奥国司」

遠藤基郎

「藤原秀衡の「常居所」と泰衡の「居所」

川島茂裕

「平泉惣別当体制と中尊寺衆徒・毛越寺衆徒」

佐藤健治

『平泉文化研究年報』第四号

岩手県教育委員会

「平安時代後期における浄土のイメージと建築造形

——平泉無量光院・毛越寺を中心に——

富島義幸

「安倍氏の「柵」の構造——交通遮断施設としての視点から——

羽柴直人

「中世都市周縁部の歴史を探る——毛越地区の調査から——その二」

岡 陽一郎

「平泉成立前後における土器様式の変遷」

井出靖夫

『平泉文化研究年報』第五号

岩手県教育委員会

「平安後期京都の伽藍と毛越寺・嘉祥寺」

富島義幸

「安倍氏の「柵」の構造（二）——居館としての柵——」

羽柴直人



「中世都市周縁部の歴史を探る―毛越地区の調査から―その二」

岡陽一郎

「柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出」

―地形学の手法を用いて―

野中奈津子

週刊義経伝説紀行28『平泉の動揺』

日経BP社

増補改訂版『奥州藤原四代 甦る秘宝』

岩手日報社

『源義経公東下り絵巻』(寺報ぐらびあ参照)

中尊寺

〔著書〕

『中尊寺 千二百年の真実』

佐々木邦世著 祥伝社

『平泉への道―国府多賀城・胆沢鎮守府・平泉藤原氏―』

工藤雅樹著 雄山閣

『陸奥話記の基礎的研究 語句篇・史料篇』

佐々木博康著 私家版

〔論文〕

「五台山文殊を謡う歌」―『梁塵秘抄』より、嵯峨清涼寺齋然の五尊文殊請来説を問う―

『仏教美術と歴史文化』 小島 裕子 法蔵館

「中尊寺領の村 その歴史的性格」

『北日本中世社会史論』 入間田宣夫 吉川弘文館

「古都平泉の生活・文化遺産」『世界遺産と歴史学』

入間田宣夫 山川出版社

「秀衡の遺言」『義経とその時代』

岡田 清一 山川出版社

「平泉における寺院」『中世の都市と寺院』

八重樫忠郎 高志書院

「井上靖と平泉紀行」『井上靖研究』第四号

小野寺 岑 井上靖研究会



「安倍・清原期の出羽と陸奥」

『日本海域歴史大系』第一巻 八木 光則 清文堂出版

〔報告書〕

『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』

一 関市埋蔵文化財調査報告書第四集 一 関市教育委員会

『中尊寺跡第六五次発掘調査報告書』 衣川右岸堤防築堤に係わる発掘調査

平泉町文化財調査報告書第八九集 平泉町教育委員会

『中尊寺経を中心とした平安時代の装飾経に関する総合的研究』

研究代表者 京都国立博物館長 興 膳 宏

『能・狂言面のデータベース化のための基礎的研究』

研究代表者 神戸女子大学文学部教授 大谷 節 子

(中尊寺所蔵の古楽面「翁」、「若女」、「老女」の調査資料を収録している)

〈近刊紹介〉

『平泉の文化遺産を語る―わが心の人々』

佐々木邦世 ティー・マップ社



『源義経公東下り絵巻』
第十四段

〔関山句囊〕

(平成十七年六月二十九日 於毛越寺)

〈第四十四回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

(席題)

麦秋や金の翳^{かげ}おくほとけ達

(大会長賞)

・有馬朗人選 特選 宮城県 菅野志知郎

毛越寺の青水無月の明るさよ

(毛越寺賞主賞)

特選 盛岡市 菊池 節子

一人づつ去りて浄土ヶ池涼み

(平泉文化会議所賞)

特選 盛岡市 遠藤 滋子

義経の落し文かも巻きゆるく

(岩手県知事賞)

・原田青児選 特選 盛岡市 井上 宮子

菖蒲田の花屑匂ふ猫車

(中尊寺賞首賞)

特選 盛岡市 柴田 綾子

竜頭の舟を寄せたる花菖蒲

(みちのく発行所賞)

特選 北上市 小原 生子

緑陰を出て遣水の音となる

(平泉観光協会賞)

・小原啄葉選 特選 東和町 菅野 トシ

石たたき浄土の石を打つてをり

(毛越寺賞)

特選 盛岡市 佐々木典子

すれちがふ人に水の香花あやめ

(岩手日報社賞)

特選 北上市 伊藤ふみ子

弁慶の地団駄^{じだんだ}聞こゆ蟻地獄

佳作 前沢町 梅森 サダ

夏衣ふはりと僧の着座せり

(平泉町教育賞)

・菅原多つを選特選 前沢町 菅野 好子

菖蒲田の風に色ある毛越寺

(中尊寺賞)

特選 水沢市 及川 忠子

花あやめ浄土につづく水の音

(岩手県議会議賞)

・戸塚時不知選特選 一関市 砂金青鳥子

義経の武者絵の電車青田ゆく

(岩手日報社賞)

特選 一戸町 駒木秋影子

翁笠うち敷くあたり朝の露

(平泉文化会議所賞)

・小林輝子選 特選 一関市 亀卦川 永子

高館の裾へ廻れり鰻舟

(平泉観光協会賞)

特選 盛岡市 大沼せつ子

経蔵の虚空を抱く今年竹

(岩手日日社賞)

特選

一関市 菅原 良江

発掘の現場に届く氷菓かな

秀逸

大船渡市 舟野 広

(兼題)

代掻しろかきの規矩きく実直まことに平泉

・有馬朗人選 (天)

盛岡市 馬場 吉彦

金色堂裏の小藪こさくに蛇へびの衣

(地)

花巻市 赤村 青路

鷹たかの眼めの炯々けいけいとして雪降ゆきふりれり

(人)

茨城県 町井 寂石

秀杉ひでしぎにまだ雪深ゆきふかき光堂

(佳作)

平泉町 旭 光

南大門みなみだいもん大き礎石いしに鳥とり交まじる

・小原啄葉選 (天)

盛岡市 久保田 絹子

青あおき踏ふみみ義経道よしかねみちへ深入ふかりす

(人)

玉山村 加藤久仁子

蛇穴へびあなを出でて頼朝よりともの眼めを持もてり

・菅原多つを選 (天)

胆沢町 岩渕 正力

でででででで 蟲むしののぼりつめたる翁おきなの碑いし

(佳作)

一関市 砂金青鳥子

早苗田はやなへだの水みづたつぷりと古戦場

・戸塚時不知選 (地)

陸前高田市 吉田ミチ子

つちふるや金色堂きんいろどうの昏くろむまで

(秀逸)

盛岡市 佐々木典子

万緑ばんりくの中一筋なかつしんの衣川

(秀逸)

盛岡市 小幡 柚流

このあたり字九輪塔田くわんたつだを返かへす

(秀逸)

北上市 菊池 郁子

裂織さきおりの箴おきのひびきや義経忌

・小林輝子選 (天)

盛岡市 小幡 柚流

一望いちぼうの奥六郡おくむつぐんや稲いねの花

北方きたかたに伝説でんせつ多し葛くわの花

東征とうせいの命みことなりけり鬼おにやんま

金箔を打ち延ばすごと鳥渡る

光堂もまた蛸の薄羽なり

『俳句』十月号 塩釜市 渡部誠一郎

『小熊座』

耀^{かがよ}へる毒茸あり中尊寺

清衡は今も祈れり露の玉

秋の蟬滅びんとして盛んなり

龍頭の舟台風の迫りをり

邯鄲や祈りの都うち建つる

『俳句』十月号 一関市 照井 翠

『寒雷』『草笛』

雪しづく岩面仏の耳大き

『寒雷』六月号 一関市 鈴木きぬ絵

雪凌ぐ板戸いちまい毘沙門堂

神籤^{みくじ}結ふ赤き冬木の芽を待み

風花を吐き出してをり磨崖仏

同〈特別作品〉 鈴木きぬ絵

覆堂の屋根のはばたきほととぎす（光堂）

毛越寺の林泉^{しんせん}のせせらぎ蜻蛉^{あまつ}生む

『寒雷』九月号 横浜市 星野 衣子

青あらし肩^やより瘦する磨崖仏

暮鳴いて寺苑の昼を深うせり

高館を攻めあげてみる夏の草

『寒雷』十月号 鈴木きぬ絵

大魚板^つ撞き座窪みし蟬しぐれ（中尊寺）

『寒雷』十一月号 星野 衣子

能面のまなじり凜と淑^{しゆつき}気かな

一管の静寂破り舞始め

『草笛』四月号 一関市 小岩奈美子

花静か義経像は若々し

義経の息つぐ清水今も尚

『草笛』六月号 軽米町 菅原 秀幸

義経に湧く山門や蛇^{さだ}の衣

『草笛』八月号 盛岡市 北田 祥子

秀衡の柳の御所の薄がすみ

『草笛』八月号 岩泉町 八重樫春子

関山をめぐる参道木^{こしたのき}下闇

『草笛』八月号 一関市 小野寺 亨
いみじくも初蟬を聞く能舞台

『草笛』十月号 小岩奈美子

舞ふシテの薄衣とほす息づかひ

『草笛』十月号 水沢市 佐々木道子

義経の横笛響け大文字

『草笛』十月号 一関市 佐藤喜佐子

揺らぎつつ容ととのふ大文字

『草笛』十月号 小野寺 亨

賢人の道を辿りし秋の寺

『草笛』十二月号 小野寺 亨

初鶏の声わたりくる御所の跡

『たばしね』二月号 平泉町 石川 松果

一と雨に背山前山立つ緑

『たばしね』五月号 平泉町 斎藤その女

稲の香をまとひ一両電車着く

『たばしね』十月号 仙台市 佐藤未登里

星月夜賢治の星もその中に

『たばしね』十一月号 平泉町 千葉 紀村

平泉 (矢巾) 池元 道雄

『馬酔木』

旅人のひらいづみ馭燕去る

いろはもみちより一山の紅葉狩

須弥壇の金色くもるちちろ虫

火の恋し無聊なる掌の観世音

こほろぎの正調を聴く能舞台

水澄めば天心のぞく亀の首

対岸は棒稲架の陣衣川

・『馬酔木』(平成十六年十二月号所載十五句)

* 同結社の有働亨・岡田貞峰両氏からも評価された。

◇句集『歩幅』

(浜松) 間淵うめ子
『草笛』「白魚火」

箒目のそのままに凍つ中尊寺

まぼろしの吹雪となれり能舞台

鐘撞いて僧揺れてをり春隣

(掲句は昭和五十三年の作)

処暑

間淵うめ子

埋火や形見の筆に墨残り
修羅能の終の一笛冴返る

『初生』(白魚火初生合同句集/第六号)

* 間淵氏は、「草笛」で宮慶一郎氏や昆ふさ子氏とも、長らく御好誼をいただいた由。

寒月の照らす鞘堂さやどう中尊寺

「読売俳壇」二月 (横浜) 内田弘司

日の光霽す垂水や光堂

「読売俳壇」四月(大牟田) 田頭俊博

全山の露より生まれ光堂

「朝日俳壇」十一月(新潟) 沢田 勉

□ よみうり五行歌

(草壁 焰太選)

特選

祭の駅は人の山

ホームに胡座

知らぬ同士が義経談義

夕映への平泉

電車は来ない

水沢市 廣太

「読売」六月

* 「句囊」は管見に入る俳誌や句集、新聞俳壇から平泉の風物詩心にかかるものを拾った (邦世)

〔関山歌籠〕

(平成十七年四月二十九日 於 中尊寺)

〈第二十六回西行祭短歌大会〉 松平盟子選

道祖神、庚申塚を片寄せてモデルハウ

スの幟はためく (中尊寺賞首賞)

一関市 鈴木千鶴子

一杵かせの毛糸をほどよき距離保ち巻きゆく姑と

日だまりのなか (平泉町長賞)

水沢市 菅原 幸子

祖母が織り母仕立てたる絹の蒲団ふたりの形

見と春の日に干す (平泉町観光協会長賞)

一関市 佐藤 道子

逝きし子のアルバムめぐり笑み返すVサイン

にはVサインして (岩手日報社賞)

山田町 沢田 孝子

卵産むのみのゲージに狭く生く鶏舎の声の束

ね哀しも (IBC岩手放送社賞)

仙台市 岩谷 紀子

間伐の林に樹液の匂ひたち剪刀撫づる日はやさしかり (岩手日日新聞社賞)

水沢市 菊池 敬助

佳作

ねじ巻ける玩具のごとく一歳の曾孫は家中駈

けて眠れり 花巻市 三田 照子

独り居の豆撒く声に青き背のネオンテトラが

一斉に向く 一関市 山岸 信子

はつかにも笹の葉揺るる音のして雪解の山の

醒むる瞬き 東和町 三浦 公朗

三世代くらす隣家のベランダに「白鳥だよ」

と少年の声 盛岡市 山内 仁子

けふ夫は名刺を整理し挨拶を交はしし人が律

儀に並ぶ 滝沢村 坂下 公子

あといく日終わりとなせる弁当を彩りよしと

初めて誉めぬ 水沢市 勝山 秀子

冬鳥をかくまいて立つ樟の木よ君を抱きたい

二月の腕 水沢市 足沢 可津

就職の試験を十個。パス一個言葉ともあれ孫はにかみつ
盛岡市 本館テイ子

「平泉短歌会」 七首

尋ね来し宝篋印塔ほうきょういんとうくずれしを積み上げ拝む春
雨のなか
山田 利恭

春惜しむ高館の岡二つ三つ白さえざえと射干しやか
の花咲く
滝澤テル子

真向ひの束稲山あしたは朝澄み山裾やなみに添ふ家並光れ
り
晴山 京子



陣羽織あむざらに鉢巻あむざらを締め「義経」といふマスゲー
ムせり碧空あむざらの野に
束稲あむざらの山の躑躅つづしにうずもれて身の裡うちまでも夕
陽に染まる
三浦 陽子

関山の萩咲き垂るる道を来てうすむらさきの
おとろへを知る
千葉 明伸
木洩れ日の差す関山に上り来て銀杏ぎんぎょの落葉背せ
に受けたり
石垣 タミ

「大池ハス（中尊寺大池跡出土）」

開花 報告

北嶺 澄 照

平成十七年七月二十四日、特別史跡「中尊寺境内」の大池跡から発掘されたハスの実が、八百年余りの時を超え、栃木県河内町の恵泉女学園園芸短大長島時子名誉教授の自宅でみごとに開花した。

大池跡は、中尊寺金色堂から直線距離にして一〇〇メートルほどのところにあり、奥州藤原氏の初代清衡公により、「中尊寺建立供養願文」（重要文化財）に記されている。「鎮護国家大伽藍一区」が造営されたと考えられている場所。池跡の大きさは一二〇メートル×七〇メートルで、中島もあり、当時の中尊寺の中枢部分ともいえる場所である。現在は水田化していて、中島跡部分には大きな樹木が生えている。

平泉町文化財センターによれば、池は二時期あり、古い段階の第一期（十二世紀前半）と、その後に手直しされた新しい段階の第二期（十二世紀後半）とがあるとのこと。ハスの実は平成十三年度の発掘調査で、第二期、すなわち三代秀衡公の時代のものとみられている池堆積土中から合計八点が出土したのである。

同センターでは平成十四年五月に、「中尊寺ハス」（注一）の栽培・開花に成功された恵泉女学園園芸短大の長島時子名誉教授に実生実験を依頼、三年がかりで花を咲かせることができたものである。

長島名誉教授によると「大池ハス（中尊寺大池跡出土）」は、花の直径二四cm、花の色は「中尊寺ハス」よりやや薄いピンク色で、花弁の先端部分の色が濃い点は「すいひれん酔妃蓮」に似ており、また、「中尊寺ハス」と同様に、花弁は現代のハスと比較すると細く、古代ハスの特徴をよく表しているとのこと。

中尊寺では「大池ハス（中尊寺大池跡出土）」を今春に株分けしていただき、山内で育てていく予定。順調に生育すると七月半ば過ぎには、その可憐な姿を大池跡で見ること

ができそうである。

注1 中尊寺ハス

昭和二十五年(一九五〇)の奥州藤原氏御遺体学術調査の際に、四代泰衡公の首級が納められた首桶からハスの実が採取され、そのうちの一個が発芽し、平成十年七月二十九日に開花した。現在は大池跡で栽培されていて、開花の時期は七月十日前後、七月末から八月初めが花の見ごろで、清楚な姿を見せてくれる。



平泉町文化財センター提供

中尊寺ハスと大池ハス(中尊寺大池跡出土)との比較

花の色	花の直径	花弁の形	花弁の数	葉の特徴	その他
濃いピンク 中尊寺ハス	直径二三cm	現代のハスと比較すると花弁が細長い (細弁は古い時代のハスの特徴)	一八枚	葉の表面が中央部はツルツルしていて、周辺部はザラザラしている	「和蓮」に近い
薄いピンク(二日目の花弁の色味が中尊寺ハスの四日目と同じくらい)	直径二四cm	中尊寺ハスと同様	一七枚	葉の表面がツルツルしている(大賀ハスと同じ)	「酔妃蓮」に近い (花弁の先端の色が濃い)

(管財部執事)

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

平成十六年十二月一日～平成十七年十二月三十一日

□ 平成十七年

二月十四日

布薩作法研修会

於台東区天王寺

大徳院

佐々木慎有出席

三月六日

陸奥教区研修会

於気仙沼市観音寺

「開宗千二百年特別授戒会」

講師 千葉亮賢師

同日

布教養成所研修会

「現代の世相つれづれに思うこと」

講師 斎藤善昭師

山内より十二名参加

五月八日

陸奥教区法要

於北上市歓喜院

山内より七名参加



六月二十一日～二十二日

東北・北海道地区布教師協議会総会・研修会

於宮城県松島町

山内より七名参加

七月六日～七日

中央法儀音律研修会

地藏院法嗣

佐々木秀厚出席

七月七日

人權啓発公開講座

法泉院法嗣

三浦章興出席

九月十一日

開宗千二百年慶讃大法会記念特別授戒会

於気仙沼市観音寺

山内より九名参加、中尊寺檀信徒二十三名

参加、会場で集まった浄財は気仙沼市の社

会福祉基金として十七万九千四百十八円、

地球救援募金として十二万円、それぞれ関

係機関に寄託した



十一月五日

天台宗一斉托鉢 於岩手県平泉町

山内より十名参加

集まった浄財十四万二千二百七十九円は平泉

町社会福祉協議会に寄託した

十一月六日

陸奥教区研修会

於平泉町毛越寺

「布薩の意義と布薩会の実践」

講師 小堀光實師

山内より十二名参加



□ 役職任免

一隅を照らす運動陸奥地方本部

(平成十七年四月六日)

理事委嘱 真珠院寺庭婦人

菅野美弥子

□ 住職任命・解任

任命 (平成十七年六月十一日)

天台寺兼務住職

(同年六月十五日)

金色院兼務住職

(同年十二月十九日)

積善院副住職

佐々木律秀

□ 教師補任 (平成十七年四月二十一日)

権大僧都

大徳院

佐々木慎有

僧都

観音院

清水広元

(同年六月二十六日)

権大僧都

真珠院副住職

菅野澄円

(同年六月三十日)

律師

地藏院法嗣

佐々木秀史

☆ 新潟地震復旧支援募金

(同年十二月一日)

十七万三千八百八十三円

中尊寺

権少僧都

円乗院法嗣

佐々木五大

☆ インド洋大津波復旧支援募金
日本赤十字社新潟県支部へ寄託した

□ 経歴行階履修

(平成十七年三月二十七日)

四十二万四千四百九円

中尊寺

入壇灌頂

願成就院法嗣

三浦智信

☆ スマトラ沖地震復旧支援募金
一隅を照らす運動総本部へ寄託した

円乗院法嗣

佐々木五大

九万七千百十円

中尊寺

(平成十七年三月二十六日)

開壇伝法

地藏院法嗣

佐々木秀厚

☆ パキスタン沖地震復旧支援募金
日本赤十字社へ寄託した

法泉院法嗣

三浦章興

五十六万四千四百十八円

中尊寺

(平成十七年三月二十八日)

願成就院法嗣

三浦智信

日本赤十字社へ寄託した

円乗院法嗣

佐々木五大

(平成十七年九月二十七日)

円頓大戒

円乗院法嗣

佐々木五大

□ 敬弔

(平成十七年九月二十一日)

薬樹王院寺庭婦人

北嶺直子

七十四才

御神事能番組

五月四日

法樂
古美式三番

開口 三浦章興
祝詞 佐々木秀厚
若女 菅野澄円
老女 菅原光聴

大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木律秀
笛 清水広元
後見 菅野宏紹

能

竹生鳥

天女 佐々木五大
ツレ 佐々木律秀
シテ 北嶺澄照

ワキ 菅野成寛
ツレ 菅野康純
菅野光聴

間 佐々木慎有

太鼓 三浦章興
大鼓 千葉快俊
小鼓 菅原光中
笛 清水広元

古美式三番

五月五日

開口 三浦章興

後見 清水広元
佐々木律秀

能

八島

後シテ 佐々木五大
前シテ 佐々木邦世
ツレ 菅野宏紹

ワキ 菅野康純
ツレ 佐々木秀厚
菅原光聴

間 破石澄元

大鼓 佐々木長生
小鼓 佐々木仁秀
笛 菅野澄円

秋の藤原まつり
中尊寺能
十一月三日

狂言

仏師

スッパ 破石澄元

田舎人 菅野澄円

能

秀衡

義経 佐々木五大
後シテ 佐々木邦世
前シテ 北嶺澄照

ワキ 菅野康純

ツレ 菅野成寛
菅原光聴

アイ 佐々木慎宥

太鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元



能「八島」(平成17年5月5日)

平成17年度

中尊寺新執行局

執事長 菅野 澄順

執事(総務) 佐々木 仁秀

執事(管財) 北嶺 澄照

執事(法務) 清水 広元

執事(参拝) 佐々木 慎宥

執事(金色院) 千葉 快俊
(兼総務次長)

参務 佐々木 秀円
(讚衡藏館長)

参務 菅原 光中
(金色堂輪番)

参務 佐々木 邦世
(本坊輪番)

平成十七年四月一日

総務次長 菅野 澄円
(會計)

管財次長 菅原 光聰
(兼総務付)

管財次長 三浦 章興
法務次長 佐々木 秀厚
(本堂守札勤務)

本堂 破石 澄元

不動堂 菅野 宏紹

讚衡藏 菅野 康純

讚衡藏勤務 菅野 成寛

金色堂勤務 佐々木 長生

金色堂輪番付 佐々木 律秀

。中尊寺仏教文化研究所

所長 佐々木 邦世

主任 破石 澄元

主任 菅野 澄寛

主任 北嶺 澄照

執務日誌抄

平成十六年十二月一日～

十七年十一月三十日

平成十六年

◇十二月

一日 月次大般若つきなみ（本堂）

平泉小学校六年生三十四名
来山（総合学習、実地見学のため）。

平泉町交通安全全運動推進町
民大会（管財部秀厚 於役場）。

三日 秋期一山会議（大広間）

四日 岩手大学工学部小山氏来山（電
動車椅子の件 総務部快俊応接）。

七日 薬師会（讚衡蔵）

貫首、インタビュアー（テレ

ビ岩手）。

「国宝中尊寺展」に出陳し
ていた宝物還蔵（管財澄照・
光聰立会）。

執事長・総務部澄円、観光
キャラバン出張（十日、大
阪・名古屋方面）。

九日 金色堂・讚衡蔵諸仏開眼法
要。

十日 JTB九州販売担当者三十
六名来山（県福岡事務所同行
総務挨拶）。

十一日 佐川美術館館長（佐川急便会長）
栗和田榮一氏他五名来山
（「国宝中尊寺展」終了につき表敬
訪問 貫首・執事長応接）。

十三日 総務部快俊、町観光キャラ
バン出張（十六日、静岡方面）。

町観光協会役員会（執事長
於日武蔵坊）。

十四日 弥陀会（本堂）

「家の光」編集部岩澤信之

氏・JA岩手南今野組合長来
山（執事長応接）。

初詣警備会議（執事長・管財
於西行苑）。

十六日 延暦寺菅田玄光副執行・京博
久保智康氏来山（最澄と天台
の国宝一展について）。

節分講中総会（法務広元他
於泉橋庵）。

十七日 白山会（本堂）
執事長、町内にて講話（平
泉ボランティアの会 於泉橋庵）。

十八日 天台陸奥仏教青年会研修会
（十九日、光明供錫杖法要の修
得 大広間）。

平泉菊花会創立三十周年記
念祝賀会（春興・管財澄照 於
日武蔵坊）。

十九日 お経を読む会（法泉院後住章
興）

川西大念佛剣舞子ども同好
会十周年記念祝賀会（執事

長 於サン日衣川荘。

二十日 平家琵琶奏者橋本敏江氏来山。

二十二日 東山町佐藤育郎氏来山（磐井清水若水送り打合せ 執事長・法務応接）。

二十三日 奥福寺様より注連繩奉納（本堂）。

二十四日 文殊会（経蔵）

NHK大河ドラマ「義経」観光推進実行委員会（以下、Nドラ「義経」観光実委と略／総務部快俊・澄円 於町保健C）。

二十六日 平泉通訳ガイド・通訳養成講座終了式（執事長 於役場）。

平泉遺跡群調査整備指導委員会専門部会保存管理計画検討部会（執事長）、同整備検討部会（管財澄照 於郷土館）。

二十七日 観光客受入れ態勢に係る交通対策会議（執事長・管財澄照・秀厚 於役場）。

二十八日 恒例御供餅つき

三十一日 午後三時 一山総礼

平成十七年

◇一月

一日 ○時 新年祈禱護摩供修行（本堂）

七時 第十三回東山町へ若水送り〳着

九時半 正月祈禱護摩（本堂）

十時半 総礼

修正会 釈迦供（本堂）

冬堂籠り（五日、結衆勤開山堂）

二日 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 薬師供（峯薬師、讚衡蔵）

十六時 謡初め（広間）

三日 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 山王供（山王堂）

十一時半 元三会 慈恵供（本堂）

四日 修正会 薬師供（瑠璃光院薬師堂）

五日 修正会 文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）

梵焼供（結衆勤、開山堂）

本日より寒修行（行者五名、町内托鉢）。

六日 修正会 釈迦供・月山供（釈迦堂）

七日 修正会 白山十二面供（本堂）

大般若会（本堂）

十四時 修正会 弥陀供（金色堂）

八日 修正会 薬師供（旧關伽堂薬師、讚衡蔵）一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

十三時半 恒例「金盃披き」

鞍馬寺執行・管理部長他来山（貫首応接）。

十一日 新年挨拶回り（執事長 盛岡・

一関。

文化財防火訓練事前打合せ

(管財澄照・秀厚 於役場)。

十二日 東山町佐藤育郎氏来山(執事

長応接)。

十三日 貫首、東京へ出向(十四日、

宮中「歌会始の儀」陪席のため)。

十四日 慈覚会(御影供 本堂)

お経を読む会(真珠院)

執事長、仙台にて講話(在

家仏教協会 「慈覚大師と東北の

人々」寺伝の中に真実を読む」

於仙台橋本ビル)。

十五日 讚衡蔵テーマ展「平泉と義経」

開催(十一月三十日)。

十七日 県物産展出向打合せ(総務

部快俊・澄円 於役場)。

十八日 総務部澄円、大阪へ出張(

十九日、岩手の物産と観光特別展

於大阪高島屋)。

文化財防火訓練打合せ(管

財部秀厚 於役場)。

二十日 県観光協会主催マスコミ招待

会(名古屋地区)四名来山(総

務部澄円案内)。

貫首、仙台にて講話(仙東

北建設協会 於日仙台プラザ)。

二十一日 前貫首多田厚隆大僧正十三

回忌法要(本堂)

二十三日 文化財防火訓練



二十四日 念仏真教総長桶谷師他三名来

山(貫首応接)。

文化観光振興基金運営委員

会(執事長 於役場)。

二十五日 総務部快俊、横浜へ出張(

二十六日、Nドラ「義経」キャン

ペーン エージェンツ訪問 於横

浜高島屋)。

貫首、撮影取材(丁A「家の光」)。

二十六日 新平泉町長鈴木清紀氏来山

(貫首応接)。

二十七日 天台宗ハワイ別院荒了寛師来

山(貫首・教区所長光中応接)。

一関信用金庫平泉支店長他

二名来山(慎有・広元応接)。

岩手県交通千葉氏来山(総務部

快俊応接)。

二十八日 めんこいテレビ田山裕明氏来

山(世界遺産キャンペーンの説明

総務部快俊応接)。

二十九日 町観光協会役員会(執事長

於平泉レスト)。

三十日 元平泉町消防団本部長三浦八郎

氏瑞宝単光章叙勲祝賀会

(管財澄照 於平泉レスト)。

◇二月

一日 月次大般若(本堂)

二日 カメラマン藤井英男氏来山
(執事長・総務仁秀・参拝慎有・
法務広元応接)。

三日 恒例大節分会(関取朝赤龍招く。
歳男歳女六十五名、町内園児が豆
を撒く)。



寒修行満行

六日 総務仁秀、盛岡へ出張(国際
観光人材活用事業「通訳ガイド・
通訳養成講座」成果発表会 於サ
ンセール盛岡)。

七日 県教育委員会生涯学習文化
課・町世界遺産推進室八重樫
氏来山(執事長応接)。

八日 総務部快俊、名古屋へ出張
(〓九日、Nドラ「義経」キャン
ペーン・名古屋エージェント訪問
於名古屋高島屋他)。

九日 岩手日報社事業局次長谷藤氏・
次長湯田氏・IBC岩手放送事
業部長越田氏来山(執事長・管
財澄照 応接)。

十日 県交通安全協会十六名来山
(総務仁秀挨拶)。

(管財部秀厚案内)。

両磐地区「もてなしの心」
向上研修会(職員小松代・山
田・松本 於花と泉の公園れいな
Deふろーれす)。

十二日 大原実光院天納久和師来山、
声明研修(〓十三日、大広間)。
町観光協会役員会(執事長)。

十三日 賞首、日光へ出向(〓十四日、
日光輪王寺前門跡鈴木常俊大僧正
葬儀参列)。

元衆議院議員伊藤英成夫妻・
関東自動車内川会長夫妻来山
(執事長案内)。

平家琵琶奏者橋本氏来山(十月
二十二日来山演奏の打合せ 執事
長・総務仁秀 応接)。

十四日 涅槃会御逮夜(本堂)

十五日 涅槃会(本堂)
お経を読む会(真珠院後住澄
巴)

十六日 めんこいテレビ手塚光一氏来

山（総務 応接）。

十七日 執事長、花巻にて講話（花

巻観光協会主催「もてなしの心」

向上研修会 於Hグランシエール

花巻）。

町観光協会定時総会（管財

澄照・総務部快俊・澄円 於商工

会館）。

十八日 貫首、インタビュー（佼成

出版社 壮年マガジン「ダーナ」

茶室）。

世嬉の二「酒林奉納・新酒

の会」（総務部快俊 於世嬉の一

酒造）。

平泉経済同友会新春講演会

（総務澄円 於岩間会館）。

二十一日 寺蔵文化財調査（二十四日、

年輪年代法 奈良文化財研究所光

谷拓実氏 管財立念）。

二十二日 アイシン軽金属(株)社長白鳥氏・

光洋サーモスタット(株)会長植松

氏・トヨタホーム(株)会長清水

氏・関東自動車会長内川氏来
山（貫首応接・執事長案内）。

県観光協会主催名古屋エージ

エント現地視察（名鉄・JT

B・JAL他）一行来山）。

二十三日 一噌庸二師来山（二十四日、

広元・澄円笛稽古 広間）。

平泉芭蕉祭俳句大会実行委

員会幹事会（執事長 於役場）。

二十四日 西行祭短歌大会実行委員会

（総務仁秀他 於一関文化C）。

総務部快俊、盛岡へ出張（県

観光協会主催「ゆったり・ぬくも

り岩手の旅」観光客誘致商談会

於Hメトロ）。

町観光協会役員会（執事長

於泉橋庵）。

二十七日 花まつり打合せ会（法務広

元・章興 応接）。

二十八日 讚衡威運営委員会（執事長・

館長光中・管財澄照他 讚衡威会

議室）。

町上下水道事業運営協議会

（管財澄照 於役場）。

高館周辺諸問題の検討会議

（総務部快俊・澄円 於役場）。

◇三月

一日 月次大般若（本堂）

二日 平泉遺跡群調査整備指導委

員会保存管理計画検討部会

（執事長 於郷土館）。

平泉東友会総会（総務部快俊

於平泉レスト）。

三日 名鉄観光サービズ編集部山田氏

来山（社内報記事の件 総務部快接）。

J R千歳駅旅行センター小野氏

来山（修学旅行下見 総務部快接）。

花まつり打合せ会（法務広

元・章興他 於琥珀亭）。

四日 東北建設協会大沼氏来山（貫首

講演御礼 総務部快接）。

町都市計画変更素案にかか

る意見を聴く会（執事長 於

役場。

五日 執事長、法話（中津川商事様

三十七名 大広間）。

六日 陸奥教区研修会（開宗千二百

年慶讃大法会記念特別授戒会につ
いて） 於（氣仙沼観音寺）。

陸奥教区布教師養成所研修

会 於（氣仙沼観音寺 十四名出向）。

七日 藤原まつり警備打合せ（管

財澄照・秀厚・総務部快俊・澄円
於役場）。

平泉芭蕉祭全国俳句大会実

行委員会（執事長 於役場）。

菊まつり協賛会役員会（総

務仁秀・管財澄照 広間）。

八日 貫首、盛岡にて講話（盛岡

中央高等学校一・二年生七〇〇名）。

十一日 一関信用金庫「新春講演会」

（講師松平貞知氏 貫首・執事長
於（ベリーノH））。

古都ひらいずみガイドの会

ガイド境内研修（二十名）来

山。

総務部快俊、盛岡へ出張（岩

手県観光協会協議会及び研修会

於（Hニューカーリーナ）。

十四日 春期一山会議（大広間）

十五日 執事長、仙台へ出張（第八

回仙台青葉能」実行委員会 於（河
北新報社）。

十七日 町観光審議会（執事長 於役

場）。

十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂

お経を読む会（円教院後住快

俊）

源義経公東下り行列保存会

総会（総務部快俊 於滝沢魚店）。

二十日 春彼岸会法要（法華三昧 本

堂）

総代・世話人会総会（貫首・

執事長・法務広元・章興他 於平
泉レスト）。

二十二日 一関信用金庫様より賽銭箱

奉納（本堂）

二十三日 総務部快俊・澄円、盛岡へ

出張（JR盛岡販売促進課）。

二十四日 開山会（護摩供 開山堂）

参務光中、横浜へ出向（故人
江正巳先生弔問）。

平泉遺跡群調査整備指導委

員会・保存管理委員会（

二十五日、執事長 中尊寺境内）。

二十八日 藤原まつり警備担当者会議

（管財澄照 於役場）。

二十九日 藤原まつり「源義経公東下

り行列」における主要役者

記者発表（総務仁秀 於役場）。

古都ひらいずみガイドの会

ガイド研修。

四寺廻廊総会（執事長・参務

澄順・総務仁秀・澄円 広間）。

三十日 NHK「義経展」に国宝金銅

華鬘他三十点の宝物を貸出

搬出（NHK展へ出陳のため 管
財澄照・光聴立会）。

Nドラ「義経」観光実事

業における企画立案検討会

(総務部快俊 於郷土館。)

◇四月

一日 月次大般若(本堂)

新執行局発足、一山辞令交付

盛岡ユネスコ協会高橋千賀子氏他来山(貫首応接)。

二日 天台陸奥仏教青年会托鉢・総会(境内・広間)。

四日 新旧執事長・総務仁秀、挨拶回り(盛岡方面)。

五日 岩手日報新一関支社長小笠原氏来山(貫首・執事長応接)。

六日 町観光協会役員会(総務仁秀)日新聞社

鈴木町長・世界遺産推進室

長来山(世界遺産基金御礼貫首・執事長・総務仁秀応接)。

七日 町観光キャラバン打合せ

(総務快俊 澄円 於案内所)。

執事長インタビュ(岩手日日新聞社)

能申合せ(大広間)

八日 仏生会(本堂)

福聚教会中尊寺支部総会(大広間)。

九日 陸奥教区家庭婦人会岩手支部総会(執事長・教区所長光中於毛越寺)。

恒例花まつり

十三日 県庁総合政策室政策推進課吉田氏来山(北東北三県・北海道知事サミットの件 総務応接)。

本坊境内施設整備検討委員会(委員長邦世、委員/成寛・澄照・秀厚・澄円。執事長・総務部快俊)。

十四日 陸奥教区議会・一隅理事会(大広間)

十五日 貫首、京都へ出向(十七日、曼殊院門跡晋山式)。

平泉郷土館特別展「源義経」

開幕セレモニー(管財澄照・総務部快俊・澄円 於郷土館)。

福岡県太宰府天満宮宮司西高辻

信良氏来山(参務光中案内)。

菊まつり協賛会総会(総務仁秀・管財澄照・章興 大広間)。

「国際観光人材活用事業」プロジェクト委員会(総務仁秀 於役場)。

十七日 観音講(山内観音院)

Nドラ「義経」プロジェクト推進実行委主催「FM歴史ウォークIN平泉」一行二百五十

名来山(総務仁秀挨拶)。

十八日 弁慶力餅競技保存会総会(法務部秀厚 於泉そば屋)。

十九日 春の藤原まつり交通整備会議(総務仁秀・管財澄照・章興 於西行苑)。

二十日 教区副所長澄順、東京へ出張(福聚教会東日本総会)。

世界遺産推進協議会役員会

(管財澄照 於役場)。

日光市長眞杉瑞夫氏来山(貫首応援)。

県知事増田ひろや平泉後援

会総会・懇親会(貫首・執事長・秀圓・邦世 於H武蔵坊)。

二十一日 総務仁秀・澄円、仙台へ出張(四寺廻廊打合せ・JR訪問

於電通東日本)。

二十二日 中尊寺一山互助会総会(広間)。

二十三日 陸奥教区寺院婦人会総会(執事長 於H武蔵坊)。

二十五日 本坊境内施設整備検討委員会(執事長・委員五名・総務部長 応援)。

衣関桜友会清掃奉仕・観桜会(執事長・管財澄照・章興)

二十六日 四寺廻廊観光関係連絡会(総務部澄円 於役場)。

能申合せ(能舞台)

二十七日 町観光協会役員会(総務仁秀)。

藤原まつり担当者打合せ会

(総務部長快俊 於商工会館)。

職員説明会(藤原まつり五月三日の態勢について 広間)。

二十九日 西行法師追善法要(本堂)

第二十六回西行祭短歌大会

(講師松平盟子氏「巡礼の地 四国と西行」)

貫首賞「道祖神庚申塚を片寄せてモデルハウスの幟はためく」

(一関市 鈴木千鶴子)

三十日 義経公・武蔵坊弁慶追善法要(貫首・秀圓・澄順・仁秀・邦世・広元・秀厚・光聰 於義経堂)。

貫首、「土日説法」初回、(九月十七日までの毎週土日本堂)

一関信用金庫感謝状贈呈式

(賽銭箱奉納)。

郷土芸能奉演(胆沢町柳田念佛剣舞)

二日 開山護摩供(開山堂)

東下り行列役者歓迎レセプション(総務仁秀・快俊 於H武蔵坊)。

郷土芸能奉演(平泉赤伏神楽)

三日 源義経公東下り行列(義経公役・俳優滝沢秀明)

郷土芸能奉演(衣川村川西大念佛剣舞)

東下り行列保存会慰労会(総務仁秀・管財澄照 於滝沢魚店)。

四日 古実式三番 神事能「竹生島」

郷土芸能奉演(胆沢町行山流都鳥鹿踊、胆沢町村ノ木沢念佛剣舞)

五日 古実式三番 神事能「八島」

◇五月

一日 春の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。

郷土芸能奉演（達谷毘沙門子
供神楽、江刺市行山流角懸鹿踊）

藤原まつり警備慰労反省会
（管財澄照 於良栄寿司）。

六日 山王講（山王堂）

八日 陸奥教区法要（教区所長光中・
副所長澄順・慎有・澄照・広元・
快俊 於北上歓喜院）。

中尊寺一山互助会運営委員
会（執事長・慎有・仁秀・澄元・
光聰 応接）。

春の祭典慰労会（一山・職員
於H武蔵坊）。

光聰 応接）。

十日 一関教育事務所長佐藤孝守氏
来山（世界遺産熟開催について協
力依頼のため 執事長・管財澄照
応接）。

十一日 四寺廻廊法要打合せ（法務
広元・秀厚・総務部澄円 於毛越
寺）。

劇団わらび座小島社長・一関地
方振興局浅沼氏来山（貫首・総
務部快俊 於商工会館）。

世界遺産推進協議会総会・
講演会（管財澄照・光聰 講師
入間田宣夫氏 於役場）。

十二日 郡市仏教会総会（法務部秀厚
於あついで屋）。

一関地区交通安全協会理事
会・懇談会（執事長 於ペリー
ノH）。

十四日 関東自動車社長安田氏他トヨ
タ関連会社社長・取締役九
名来山（貫首懇談・執事長案内）。

仙台青葉能（貫首 於東北電力
ホール）。

十七日 平泉菊花会総会（管財澄照・
章興 於泉そば屋）。

十九日 総務仁秀・澄円、盛岡へ出
張（四寺廻廊の件 於JR盛岡）。

二十日 平泉商工会青年部通常総会
（総務部快俊 於商工会館）。

二十一日 Nドラ「義経」プロジェクト
推進実行委員会義経サミツ

トIN平泉（総務仁秀・快俊
於旧観自在王院庭園）。

京都大原實光院天納久和師葬
儀（執事長参列）。

鎌倉市長石渡徳一氏来山（参
務邦世案内）。

二十二日 義経サミット出席者一行来
山（総務仁秀案内）。

二十三日 平泉芭蕉祭全国俳句大会打
合せ（参務邦世 於役場）。

二十四日 一関地区交通安全協会総会
（執事長 於ペリーノH）。

二十五日 一関信用金庫本部来山（総
務仁秀応接）。

平泉商工会通常総会（総務
仁秀 於商工会館）。

二十六日 県観光協会評議員会（執事
長 於H東日本盛岡）。

町観光推進実行委員会監査
（執事長 応接）。

二十八日 法務広元・総務部澄円、浄法
寺へ出張（天台寺晋山式打合せ

於天台寺。

三十日 ユニバーサルデザイン観光

地推進支援プログラム検討

ワーキンググループ会議

(管財部光聰 於役場)。

三十二日 岩手大学工学部小山氏来山(電

動車椅子寄贈 総務対応)。

貫首、撮影取材(対談 篠田

正浩氏 茶室)。

Nドラ「義経」観光実委総会

(執事長・総務部快俊・澄円 於

役場)。

平泉芭蕉祭全国俳句大会事

務局会議(参務邦世 於役場)。

◇六月

一日 月次大般若(本堂)

讚衡蔵運営委員会(委員長秀

円。執事長・管財澄照他 応援)。

総務部快俊、盛岡へ出張(県

観光協教育旅行誘致宣伝総会 於

盛岡Hニューカーリーナ)。

本坊境内施設整備検討委員

会(執事長・委員五名・総務部快

俊 応援)。

二日 平泉をきれいにする会総会

(管財部章興 於役場)。

三日 町観光キャラバン打合せ

(総務部快俊・光聰・澄円 於役

場)。

貫首インタビュー(時事通信

社 応援)。

四日 伝教会(御影供 本堂)

淡交会福島支部四十四名来

山(お茶室・広間)。

五日 「ハングル語」通訳ガイド

養成講座開講式(総務仁秀

於役場)。

東北歴博ボランティアの会

一行四十九名来山(管財対応)。

開宗千二百年慶讃大法会記

念特別授戒会習礼(教区所長

光中ほか出向 於観音寺)。

「おくいニッポン岩手県」撮影

金色堂他)。

河北カルチャーセンター一

行二十名来山(「楽しい古代史」

管財対応 かんさん亭)。

七日 総務仁秀・澄円・法務広元、

仙台へ出張(四寺廻廊説明会)。

参拜慎有、江刺へ出張(前N

HK会長海老沢勝二氏に感謝する

会 於えさし藤原の郷)。

七日 ウォーキングフェスタIN

平泉運営委員会(総務部快俊

於役場)。

貫首、日光へ出向(〓八日、

日光輪王寺門跡晋山式)。

前NHK会長海老沢氏来山

(参務光中案内)。

八日 四寺廻廊町内打合せ(総務

部快俊・澄円・法務部秀厚・管財

部光聰 於観光協会)。

九日 福岡地区エーシエント各社

来山(岩手県福岡事務所主催。総

務部快俊案内。

貫首、浄法寺へ出向（十三日、天台寺普山式）。

十一日 天台寺住職瀬戸内寂聴師二十

周年記念ならびに新任職菅

野澄順師普山式（貫首・秀圓・

光中・邦世・仁秀・高信・慎有・

広元・康純・澄円 随行律秀 於

天台寺）。

長島小学校二年生二十一名

来山（総合学習、社会見学のため）。

十一日 貫首、インタビュー（読売

新聞社・読売広告 応接）。

十二日 法華経一日頓写経会（本堂）

総務仁秀、東京へ出張（多

るさと平泉会 於池之端文化C）。

十三日 四寺廻廊二周年記念四寺廻廊巡

拝「平泉」（於毛越寺）中尊寺）。

十七日 北海道・北東北三県知事サ

ミット打合せ（総務部快俊）。

貫首、仙台へ出向（河北新報 創刊百八周年記念パーティー 於

仙台国際H）。

十八日 管財部章興、二本松へ出張

（菊まつり用菊苗受取り 春興・

職員千葉・伊藤同行）。

総務部快俊、盛岡へ出張（岩

手日報創刊百三十周年記念「古典

芸能と声明」 於県民会館）。

県観光協会主催マスコミ招待

会一行来山。

十九日 町教育委員会主催「歴史の道

ウォーキング」一行来山。

二十日 自在房蓮光忌法要（本堂）

本坊境内施設整備検討委員

会（執事長・委員五名・総務部快

俊 応接）。

二十二日 布教師会東北・北海道地区

協議会（二十二日、教区所長

光中他 於松島）。

平泉芭蕉祭全国俳句大会打

合せ（参務邦世 於役場）。

二十二日 栃木県茂木市民生委員工藤氏一

防火管理者講習会（二十三日、管財章興 於ダイヤモンドP）。

ウエーサ力式典（法務部秀厚

於花泉町宝持院）。

平泉をきれいにする会観光

道路周辺清掃（管財澄照・光

聴・職員 於観光道路周辺）。

日本今様詞舞楽会来山（今

様奉納の打合せ 執事長応接）。

二十三日 一関警察官友の会役員会

（執事長 於一関警察署）。

陸奥教区第二部檀信徒総会

（教区所長光中・副所長澄順・法

務広元 於毛越寺レスト）。

二十四日 福聚教会陸奥地方本部講習

会（講師丸岡昌舜師 大広間）。

弁慶力餅競技保存会研修会

（法務部秀厚 於平泉大沢温泉）。

二十五日 青森明光寺様一行七名団参。

密教図像学会（会長真鍋俊照

師 一行五十名来山）。

二十六日 県消防協会一関地方支部・

一 関連合演習（管財部章典
於平泉レスト）。

「ハングル語」通訳ガイド
養成講座（講師邦世 於役場）。

文化財愛護少年団来山（管
財澄照 かんざん亭）。

（財）栃木県青年会館内間茂氏
他十八名来山（貫首 本堂）。

栃木県佐野市植野地区民
生・児童委員一行二十一名
来山（普門院高久昭恵師引率 貫
首 本堂）。

町観光キャラバン打合せ
（総務部快俊・光聴 於役場）。

町観光協会役員会（総務仁秀）。

赤尾三千子氏（龍笛 銘 薄墨
の奏者）来山（貫首・施餓鬼世話
方・執事 茶室）。

二十八日 本坊境内施設整備検討委員
会（委員五名・総務部快俊 応接）。

前浄法寺町長山本氏ご夫妻来
山（貫首）。

仙台市ひまわり号を走らせる会渡
辺様一行視察（十月十日の件、
十年前かんざん亭前に埋めたタイ
ムカブセルを掘り起こす件にて来
山 総務対応）。

北上川リバーカルチャーA
理事会・定期総会（総務仁秀
於ヘリーノH）。

二十九日 第四十四回平泉芭蕉祭全国俳
句大会（講演・有馬朗人氏「科
学・技術者と詩歌」 貫首 於毛
越寺）。

三十日 日経新聞土田芳樹氏来山（芭
蕉関係の取材 参務邦世応接）。

◇七月

一日 月次大般若（本堂）

水かけ御輿警備会議（参務
邦世・管財澄照・章興 於平泉商
工会）。

二 日 参務邦世、尾花沢へ出張
（三日、奥の細道尾花沢サミッ

ト 於尾花沢市文化体育館）。

中尊寺門前会役員会（管財
澄照 於平泉レスト）。

三日 総務部快俊・光聴、北海道
へ出張（八日、修学旅行誘客
観光キャラバン 於札幌・函館・
室蘭各中学校）。

四 日 三重県伊賀市長今岡睦之氏（芭
蕉顕彰会会長）他二名来山（貫
首懇談・参務邦世 案内）。

六 日 法務部秀厚、滋賀へ出張（
七日、中央法儀音律研修会 於天
台宗務庁）。

七 日 めんこいテレビ田山裕明氏来
山（執事長・総務仁秀応接）。

九 日 世界遺産塾講座一行来山
（管財澄照案内）。

十 日 如法經十種供養会（頓写法華
経奉納式）。

執事長、佐渡へ出張（十一
日、源義経公東下り保存会研修
旅行）。

十一 日 参務邦世、尾花沢へ出張
（三日、奥の細道尾花沢サミッ

旅行）。

一日、源義経公東下り保存会研
修旅行）。

一日、源義経公東下り保存会研
修旅行）。

一日、源義経公東下り保存会研
修旅行）。



7月9日 世界遺産塾講座一行来山

吉田英子氏歌集「光をつなぐ」出版記念並びに同歌集平成十六年度岩手県芸術選奨授賞記念祝賀会（総務仁

秀・快俊 於Hサンルート一閲。

十二日 長島時子先生来山（十三日、

中尊寺ハス開花状況視察 管財澄照・章興）。

十三日 一関警察官友の会総会（執

事長 於ダイヤモンドP）。

十五日 福聚教会陸奥地方本部講習会（大広間）。

十六日 連合喜桜会発表会（十八日、能舞台）。

平泉水かけ神輿宵宮・ひらいずみ夜祭り開会式（総務仁秀 於観自在王院）。

十七日 清衡公御月忌（胎曼供 本堂）
平泉総社神輿渡御

十八日 馬場あき子氏、連合喜桜会発表会に来山（貫首挨拶）。

法務広元、気仙沼へ出張（授戒会打合せ 於観音寺）。

十九日 県総合政策室吉田拓氏他七名来山（九月二日、北海道・北東北

三県知事サミットの件 総務部快

俊広接）。

二十日 栃木県岩舟町旭岡氏一行八名来山（貫首案内）。

いづくし園社長「菅原清彦氏叙勲を祝う会」（貫首・参務邦世 於いづくし園）。

二十一日 興雲律院・日光植物愛好会一行二十名来山（貫首 広間）。

フタバ「平泉を囲む会」（執事長 於日武蔵坊）。

二十二日 菊まつり協賛会役員会（執事長・管財澄照・章興 広間）。

賞首、盛岡へ出向（県博「義経展」オープニング）。

二十四日 フタバ平泉新社社長七原直久氏他二名来山（貫首 茶室）。

二十五日 町農林商工観光課長・毛越寺執事長・総務部長来山（執事長・総務仁秀・快俊広接）。

二十六日 岩手銀行会社説明会（執事長 ベリーノH）。

二十七日 県保護監察所長清水氏・栃木県

保護監察委員長川本氏来山（貫首応接）。

二十九日

読売新聞盛岡支局長岡田知嗣氏
他来山（世界遺産サミットIN
平泉打合せ 総務一応接）。

三十日

一山協議会（広間）

三十一日

北上市和賀岩沢地区一行四
十名来山（貫首挨拶 邦世案内）。
筑紫哲也氏・鈴木輝隆氏来
山（貫首挨拶・参拝慎有案内）。
一山懇話会（於平泉レスト）。

◇八月

一日

月次大般若（本堂）

JR東日本盛岡支社嶋田営業部
長来山（執事長挨拶・総務仁秀
案内）。

総務仁秀・法務広元・総務部

澄円、仙台へ出張（四寺廻廊

法要反省会 於電通東日本）。

二日

衣関桜友会清掃奉仕（管財
開山堂付近）。

県総合政策室吉田氏他来山

（知事サミット打合せ 総務応接）。

岩手日報社出版部長東山耕三氏

他来山（甦る秘宝」復刊御礼

執事長応接）。

三日

衣川遺跡群発掘現場見学

（貫首・執事長・邦世・成寛・澄
照）。



四日

十五時半、〈平和の鐘〉打鐘。
町水辺プラザ検討委員会

（参務邦世 於役場）。

六日

観光レクリエーション客動
態調査（町農林商工観光課 本
堂前ほか）。

七日

夏安居（堂籠り 十一日、結
衆勤 開山堂）

八日

天台仏教青年連盟「開宗千二
百年慶讃大法要慶讃事業
『不滅の法灯全国行脚』」
法灯護持（二十五日、本堂）。

九日

国際人材活用事業プロジェクト委員会（総務仁秀 於商工
会館）。

十日

平泉をきれいにする会「ゴミ
持ち帰り運動」実施（管
財部章典 於平泉前沢IC）。

十一日

町農林商工観光課来山（総
務心接）。

江刺餅田史跡保存会会長菊地勝

一氏他二名来山（貫首・総務

仁秀心接）。

大文字まつり担当者打合せ

会（法務広元 於良榮壽司）。

十一日 F.M.岩手菅野氏他来山（知事
サミット打合せ、総務広接）。

十四日 第二十九回中尊寺新能

能「吉野静」（佐々木宗生師）

狂言「鶏聳」（野村万作師）

能「大会」（佐々木多門師）

途中より降雨にて難儀す。

十五日 町成人式（管財澄照 於郷土館）。

十六日 第四十二回平泉大文字まつり

先祖代々追善法要（町内寺院
於北上川館裏河川敷）。

十八日 仙台市博「興福寺展」参観

（貫首・一老・秀円・長生・澄照）。

十九日 仙台市博「興福寺展」参観

（春興・澄元・宏紹・光聰・律秀）。

年輪年代法調査結果報告会

（奈良文化財研究所水谷拓実氏・
窪寺茂氏来山 大広間）。

二十日 毛越寺施餓鬼会（参務秀圓参

席）。

観福寺施餓鬼会（澄順・康純

参席）。

二十二日 県主催東北広域教育旅行誘

致委員会・東急観光五名来

山（総務部快俊案内・章興坐禅体

験説明）。

二十三日 大施餓鬼会御建夜（本堂）

二十四日 大施餓鬼会・放生会（本堂）

二十五日 文化庁記念物課調査官市原富士

夫氏来山（県生涯学習課職員・
町世界遺産推進室職員同行 管財

澄照案内）。

二十六日 貯水槽清掃（管財部）。

筑波大学一行二十名来山

（貫首挨拶・参務邦世案内）。

二十七日 平家琵琶（十月奉演）打合せ

（参務邦世・総務仁秀 広接）。

大正大学博物館実習（〃九

月一日、三年生二十人 講師邦世

他 讚衡藏・かんざん亭）。

二十八日 教区所長光中・秀圓・慎

宥・広元・澄照・快俊・光

聰、気仙沼へ出張（開宗十二

百年慶讃大法会記念特別授戒会習
礼 於観音寺）。

総務仁秀、紫波へ出向（陣ヶ

岡鎮座蜂神社大祭法要）。

二十九日 県総合政策室吉田氏他来山

（総務対応）。

康純・宏紹・光聰・章興・

律秀、石巻へ出向（〃三十日、

東北仏青總會 於石巻リバーサイ

ドホテル）。

三十日 ユニバーサルデザイン観光

地推進外部モニターツアー

一行八名来山（管財部光聰）。

三十一日 龍玉寺施餓鬼会（参務光中参

席）。

町キヤラバン打合せ（総務

部快俊・澄円 於役場）。

◇九月

一日 月次大般若（本堂）

総務仁秀・章興、瀬見温泉

へ出張（亀割観音祭礼）。

鈴木町長他来山（町合併五十年記念誌御礼 貫首応接）。
 県総合政策室吉田氏・テレビ岩手来山（知事サミット準備本堂）。
 国立音楽学院学生来山（執事長 かんざん亭）。
 二日 北東北三県・北海道知事サミット（貫首 大広間・本堂・広間）。
 三日 泰衡公御月忌（金曼供 本堂）
 今様奉納（日本今様謡舞楽会石原さつき様他 本堂）。
 大正大学オーブンカレッジ二十名来山。
 大江幸若舞奉納（能舞倉）
 仕舞「八島」（佐々木多門師）
 仕舞「船弁慶」（佐々木宗生師）
 謡 「秀衡」（喜桜会）
 大江幸若舞「和泉城」・「高館」
 和賀町史談会一行来山。

五日 総務部快俊、札幌へ出張（七日、県観光教育旅行誘致説明）。
 六日 県教育委員協議会（教育長照井崇氏・教育次長・教育委員）・県生涯学習文化課中村英俊氏来山（町世界遺産推進室職員同行 執事長挨拶、管財澄照案内）。
 七日 NHK「義経展」出陳の宝物還蔵（管財澄照・光聰立会）。
 八日 開宗千二百年慶讃大法会記念特別授戒会打合せ（応接）。
 十日 総務仁秀、紫波へ出向（五郎沼薬師神社祭礼 於薬師神社）。
 教区所長光中・執事長・秀圓・慎宥・広元・康純・澄照・快俊・光聰、気仙沼へ出張（開宗千二百年慶讃大法会記念特別授戒会 於観音寺）。
 十一日 開宗千二百年慶讃大法会記念特別授戒会（於観音寺）。
 十二日 仙台光円寺様一行九名来山。
 十三日 読売新聞岡田支局長・塩見

記者来山（参務光中案内）。
 十四日 群馬県沼田市民生委員OB会一行三十二名来山（執事長案内）。
 十六日 ウォーキングフェスタIN平泉実行委（総務 於役場）。
 十七日 白符忌（本堂）。
 十八日 森百合氏（藤原氏御遺体学術調査員）来山（貫首挨拶・参務邦世案内）。
 世界遺産サミットパネラー八名来山（日光市長眞杉瑞夫氏他 貫首挨拶 参務光中案内）。
 町敬老会（総務仁秀 於平中体育館）。
 貫首、町内にて講演（読売新聞社主催「世界遺産シンポジウム」 於平小体育館）。
 十九日 赤堂稻荷例祭（護摩供）
 二十日 菊まつり協賛会役員会（執事長・管財澄照・章興 広間）。
 二十三日 秋彼岸会法要（本堂）

岩手朝翠会詩吟奉納（日比野北鵬氏一行 金色堂）。

二十六日 管財部光聴、盛岡へ出張（於岩手県立博物館）。

貫首、インタビュー（「比叡の光」 延暦寺教化部大角実豊師茶室）。

二十七日 町観光推進会議（総務仁秀・快俊・澄円 於役場）。

平山美術館館長平山助成氏来山（参拝慎有案内）。

貫首、京都へ出向（三十日）。
二十七日 青蓮院本尊熾盛光如来御開帳開闢法要（貫首 於青蓮院宸殿）。

二十九日 妙法院門跡菅原信海大僧正傘寿祝賀会（貫首 於ウエスティン都H京都）。

管財澄照・光聴、東京へ出張（三十日、テーマ展「平泉と義経」に特別展示される日本画「平泉の義経」借受 於山種美術館）。

三十日 足利市国指定史跡樺崎寺跡

愛護会二十五名来山（参務邦世案内）。

宗務快俊・職員伊藤、滋賀へ出張（十月一日、開宗千二百年慶讃大法要 於延暦寺）。

◇十月

一日 月次大般若（本堂）

安田鞞彦画「平泉の義経」

特別展示（二十八日、讃衡蔵）

野村万作・萬斎狂言の会（慎有・澄円 於一関文化C）。

二日 慈眼会（本堂）

三日（財）文化財建造物保存技術協会八名、研修のため来山（管財澄照案内）。

町観光推進会議（総務部快俊・澄円 於役場）。

四日 浄土宗岩手教区六名来山。

参務邦世、東京出張（藤沢摩彌子『近藤乾之助 謡う心、舞う

心』出版祝う会 キヤピトル東急）。

光聴、東京へ出張（五日、県観光協「ゆったり・ぬくもり岩手の旅」誘致説明会・東京方面修学旅行誘致説明会 於飯田橋）。

五日 能申合せ（大広間）

六日 貫首、法話（矢板市文化財愛護協会三十五名 本堂）。

瀬戸内寂聴師来山（貫首・執事長応接/NHK「夢の美術館

みほとけの美百選」撮影 金色堂内 管財部光聴立念）。

八日 関東自動車内川会長・トヨタ関係者九名来山（貫首懇談・執事長案内）。

九日 めんこいテレビ主催「ウォーキングフェスタIN平泉」一行来山。

十日 友情列車「ひまわり号」を走らせる会百四十名来山（タイムカプセル掘り出し・記念植樹 執事長挨拶）。

- 十一日 総務部快俊、盛岡へ出張（東北広域教育旅行誘致委員会 北東北地区 於マリオス）。
- 十三日 教区所長光中・副所長澄順・宏紹、滋賀へ出張（十四日、福聚教会全国大会 於延暦寺）。
観光推進会議（総務部快俊・澄円 於役場）。
- 十四日 曹洞宗山形県第一宗務所十一教区一行三十二名団参。
紫波郷土史同好会一行来山（管財澄照案内）。
- 十五日 平泉町合併五十周年記念式典（執事長）。
- 十六日 お経を読む会（積善院後住律秀）。
- 十八日 福岡県教育委員清原氏他七名来山（管財澄照案内）。
貫首、盛岡へ出向（荒了寛師「やすらぎの仏画展」 於ギヤラリーカワトク）。
- 十九日 白虎堂祭礼（山内葉樹王院）。

- 二十日 菊まつり開幕法要
- 二十一日 山内葉樹王院前任内室北嶺直子様逝去。
古都ひらいずみガイドの会ガイド研修（参務邦世）。
- 二十二日 貫首、法話（えさし郷土文化館 一行四十名 本堂）。
義経追善法要（本堂）
橋本敏江師、平家琵琶奉納。
齋藤一蓉師、一弦琴奉納（本堂）。
- 二十三日 齋藤一蓉師・門弟二十名、一弦琴奉納（本堂）。



- 二十四日 日光市黒髪会一行十八名来山（貫首挨拶・祈祷導師 不動堂）。
- 貫首、法話（立正佼成会練馬教会 会長・部長・支部長他十八名）。
- 貫首、法話（日光文化協会 一行四十一名）。
- 二十五日 葉樹王院前任内室北嶺直子様葬儀（本堂）。
- 二十六日 貫首、法話（いわて十六年会）
フィリピン慰霊巡拝者三十名）。
- 二十七日 貫首、法話（東北管区警察学校 学生八十一名）。
- 能申合せ（能舞台）
- 二十八日 秀衡公御月忌（金曼供 本堂）
町観光協会役員会並びに小野寺邦夫氏町政功労者受賞祝賀会（総務仁秀 於H武蔵坊）。
- 三十日 平泉中学校生徒・PTA二百名来山（法務広元対応）。
栃木教区普門院高久昭恵師一行四十名（参務邦世案内）。

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児

行列、常の如し。

郷土芸能奉演（胆沢町柳田念

佛剣舞）

二日 菊供養会（本堂）

郷土芸能奉演（胆沢町行山流

都鳥鹿踊、達谷窟毘沙門神楽、赤

伏神楽）

三日 謡・仕舞（喜桜会奉納）

狂言「仏師」

中尊寺能「秀衡」

四日 貫首、江刺へ出向（於勝軍寺）。

五日 妙法院御門主・奥様来山

（貫首・執事長 茶室）。

一隅托鉢会

六日 陸奥教区研修会（布薩作法の

解説と実践」講師小堀光實師 貫

首・教区所長光中他十名 於毛越

寺）。

木鶏クラブ二百名 於H東日本）。

八日 町観光推進実行委員会（総

務部快俊・澄円 於役場）。

九日 中尊寺職員 故阿部栄子様葬

儀（総務仁秀 於衣川自宅）。

本坊境内施設整備検討委員

会（執事長・委員五名・総務部快

俊 応接）。

十日 如法写経十種供養会（本堂）

十一日 毛越寺執事長・総務部長来

山（執事長・総務仁秀・快俊 応

接）。

十二日 平泉吟友会三十周年記念発

表会（総務仁秀 於日武蔵坊）。

十三日 延暦寺一山乘実院真嶋康祐大

僧正本葬儀（執事長参列 於生

源寺）。

菊まつり表彰式・二十周年

記念式典（大広間）

十四日 第二十二回平泉町民号（十六

日、宏紹 長崎・雲仙方面）。

法務広元・総務部澄円、仙台



11月13日 菊まつり20周年記念式典

へ出張（四寺廻廊会議 於仙台
電通）。

十五日 管財部光聰、東京へ出張（山
種美術館所蔵安田毅彦画「平泉の
義経」返納）。

本坊境内施設整備検討委員
会（執事長・委員五名・総務部快
俊・三衡設計舎二名 応接）。

十七日 いっくら国際文化交流会八
名来山（春興案内）。

十九日 三重県議会議長・副議長・
岩手県議会議長・副議長来
山（総務仁秀案内）。

貫首、法話（「義経ゆかりの地
を訪ねて」二行二百四十名 本堂）。

二十一日 本坊境内施設整備検討委員
会（委員五名・総務部快俊・三衡
設計舎勝部氏ほか二名 応接）。

二十三日 天台会御逮夜（結果勅 本堂）。

二十四日 天台会厳修（御影供 本堂）。

町観光協会役員会（総務仁秀）。
二十五日 岩手河川国道事務所工務第三課長

小山幸男氏来山（衣川橋架け
替えの説明 執事長 応接）。

総務仁秀・快俊、松島へ出
張（広域観光連携シンポジウム
「仙台・気仙沼・松島・平泉」
於瑞厳寺）。

二十六日 本坊境内施設整備検討委員
会（執事長・委員五名・総務部快
俊 応接）。

貫首、花巻にて講話（生長
の家岩手教区栄える会 於花巻温
泉千秋閣）。

二十八日 陸奥教区福聚教会研修会
（三十日、宏紹 於毛越寺）。

一関菊花会菊花展表彰式
（管財澄照・章興 於一関文化C）。
二十九日 職員研修旅行（十二月三日、
タイ・カンボジア方面、第一班

貫首・秀圓・澄元・快俊・康純・
章興同行 一行二十名）。

御奉納者 御芳名

平成十六年十一月～平成十七年十一月

一、御供用餅米 五十キロ

一関市 いわて南農業協同組合様

一、御供用餅米 三十キロ

衣川村 千葉卓治様

一、節分会用大豆 十キロ

江刺市 佐賀秀一様

一、賽銭箱（本堂備付）

一関市 一関信用金庫様

浄財御奉納者 御芳名

平成十六年十二月～平成十七年十二月

平泉観光写真社様

五十万円

鞍馬寺様

五万円

大聖院様

十万円

命徳寺様

五万円

念法眞教総本山金剛寺様

五万円

日光輪王寺様

三万円

ドリーミング様

三万円

㈱ミヤノ様

三万円

信濃比叡広極院 村上光田様

三万円

塩田美子・倫子様

十万円

塩田美子・倫子様

十万円（二回目）

小暮道樹様

五万円

北日本銀行一関支店様

四万円

受楽寺様

三万円

工藤忠道様

三万円

富岡八幡宮御輿総代連合会様

五万円

岩舟山高勝寺様

五万円

信濃国分寺様

七万円

関宗代・関社中一同様

三万円

一関信用金庫平泉支店様

三万円

日本今様譚舞楽会様

七万円

大正大学様

三万円

岩手県青年団体協議会様

四万円

小峰彌彦様

三万円

浄土宗岩手支部様

五万円

栃木県矢坂市文化財愛護協会様

三万円

清虚洞一絃琴様

三万円

日光黒髪会様

三万円

立正佼成会練馬協会様

三万円

日光市文化協会様

五万円

菅原信海様

三万円

木鶏クラブ様

十万円

最勝寺様

三万円

不動尊篤信御奉納者御芳名

平成十六年十二月～平成十七年十二月

富良野市 南砂利工業様

三万五千元

野村隆様

季毎御供物

小樽市 村口初男様

季毎御供物

青森県 笠原山不動院代表
平賀町 小笠原喜世様

五十九万一千円
御供物・献酒

十和田市 村上勝行様

三万円

弘前市 斎藤直武様

季毎御供物

青森県 工藤銀四郎様
南部町

季毎御供物

秋田市 木村英夫様

六万七千元

農協観光秋田支店様

四万円

男鹿市 大瀧陽子様

三万五千元

秋田県 八森町 ベル美容室高橋紀美世様

季毎御供物

横手市 米沢周一郎様

御供米

大館市 荒川栄光様

季毎御供物

久慈市 中塚ミヤ様

三万円

二戸市 米沢励様

季毎御供物

滝沢村 齋藤實、ツコ様

四万三千元

釜石市	水戸松男様	三万円	宮城県 志津川町	山口昇様	三万円
水沢市	佐々木久様	三万円	仙台市	中越テック株式会社東北支社様	二十万円
平泉町	平泉中学校昭和三五年卒業生 還暦同級会様	十二万八千円		小島ヒデ子様	御供米
	(有)ケーテック平泉工事事務所 代表 芦萱敬一様	三万九千円	山形市	沼田とも子様	季毎御供物
	一関信用金庫平泉支店様	三万円	郡山市	(株)田丸共栄会様	十三万円
	(有)千葉製材所様	三万円	新潟市	笹山まり子、加茂喜代子様 (株)スタンドサービス 代表 吉田幹夫様	三万円
	石川巖覚様	御供米	水戸市	松原クリーニング会様	季毎御供物 献酒
	東山園様	季毎御供物	日光市	藤枝恵枝子様	季毎御供物
一関市	(有)豊隆軌道千葉幸八様	九万五千円	さいたま市	日光黒髪会様	三万円
	川嶋印刷株式会社様	十万円		小川春吉様	三万五千円
	山平様	三万円	和泉市	北山英一様	四万五千円
	(株)精茶百年本舗様	三万円		細渕ます美様	六万円
栗原市	萩野中学校第十三回卒業生 還暦同級会様	九万六千円		辻林正博様	献酒
塩竈市	梅津きね子様	九万円			
宮城県 富谷町	小山利男様	五万五千円			
古川市	岸久幸様	五万五千円			
登米市	ドラゴンクラブ龍武会様	四万円			
宮城県 丸森町	樋口光裕様	四万円			